
勇者ですか？ いいえ、過負荷です

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ですか？ いいえ、過負荷です

【Zコード】

Z8213U

【作者名】

紅の雲雀

【あらすじ】

この作品は「めだかボックス」の設定を使わせもらっています。

目を覚ましたらそこは異世界で
俺は勇者になつて
魔王退治することになつて
俺は過負荷なんだけど……

最初は無力な才能で（前書き）

おひさしぶりでーす
久しぶりの更新ですねー
いやーねー
いろいろ悩んでたんですよ
この作品をつくるのか?とかね
まーいつもおひの駄文ですが
よろしくです

最初は無力な才能で

昔の夢を見た。

まだ幼く無邪気だつた頃の。

昔、夢見た理想は、今じや無理だと決めつけた幻想。

昔の俺は“諦める”ことを知らなかつた。

だから“頑張る”ことしか出来なかつた。

でも今じや現実を見て“諦める”ことを覚えた。

その代償なのか“頑張る”ことを忘れた。

全て“諦めた”で終わらせ。

全て“面倒くさい”で逃げる。

俺はいつからそんな人間になつたのだろう。

小学校高学年。

俺は仮面をつけはじめた。

嘘という名の仮面を。

作り笑いで“良い人”を演じるようになつた。

そうすればみんな仲良しでいられるから。

問題にはならないから。

仮面をつけた生活は続いた。

中学2年生の中盤。

事件が起こつた。

『お前の作り笑いが気にいらねんだよお！－』

俺の作り笑いがバレた。

『面倒くさい人だね。みんな笑つていればいいじゃないか。作り笑いだつていいだろ？ 君は“みんな仲良し”なんて幻想を抱いているのかい？ それは間違つてる。そんな幻想無理だ。絶対一人は作り笑いで“良い人”演じてる。俺みたいにね』

彼は俺の胸ぐらを掴んできた。

そこから覚えてない。

たしか彼が俺にたいして何かを言つてきた。
スキル

その後で俺の“過負荷”が発動した。

そして現在

黒神 俺を改心させて本當だ

卷之三

「二本に無理な詰方で、お詫び申す。」

卷之三

「桜島3年生！」

「それは無理な話。そして俺の過負荷は良い学園生活を送るには必
然的に年生 貴方の才能でこの学園を良くしていくべきだよ」

要ないしね

一では、たゞくて……」

黒神めだかが俺のところに突っ込んできた。
その後のことは覚えてない。

たしか倒れた？

いや、痛みを感じてない……。

感じる前に倒れたのか？

まごく現状が分かってない

卷之三

ああ、確かこ業にむかひのカシダで戦つたが。

だからつてな。

! ! !

俺の目には応じ土地しか見えなかつた

何をどうにかしながるんか

ため息をつくしかできない」の状況。

俺は何が起^ひってるのか、まったく理解ができなかつた。

「……あの」

「つたくどうすればいいんだよ。

「……聞こえますか？」

「あー早く家に帰りたい。

「……返事をしてくれると助かります」

「全^てがだりーよ、考^えるのもめんどいよ。

「聞こえますか！」

「ん？」

今まで氣づかなかつたけどそこには少女がいた。
俺より年下かな？

「何か用？ 俺は今大変な状況で困つてるんだ」

「はう……すみません……」

少女は謝り静かになつた。

「あ、そ^うそ^う。質問いいかな」

「はい、何でもどうぞ」

「じゃあ、ここいつでど^うじ？」

「ここですか？ ここはアクアですよ？」

アクア？

聞いたことがない土地だ。
俺が知らないだけか？

「それって日本？」

「にっぽんですか……？」

「あれ？ じゃあ、ここは日本じゃないのかな？」

「まあ、いいや。で、何で君は俺に話しかけたの？」

「それは……」

「それは？」

「笑いません？」

「ああ、笑わない」

「伝説……まあ、噂なんですが。『光に導かれた勇者が現る』そん

な噂がアクアで広まつてゐるんです」

勇者？

RPGか何かか？

「それでついせつとき一筋の光がここに落ちてきたんです。それが貴方です」

「わー、俺が勇者？！」

「タウ」タウ・タウ

「ああ、すまん。で、俺がその勇者だと？」それでこの世界には魔

「三かいで俺がそれを倒すのか」「妻一ですな

やれやれ……僕はベタなRPGの世界に来たのか……。

「でも残念ながら、俺には勇者の素質なんてないよ。」
マイナス

「でも尊

「斤金尊、奄」

「でも貴方が光と共に来たのは事実です。私はこの田でしつかり見ましたから」

「だから

俺は話そうとしたら、足音がした。

一人じゃない数人……いや数十人の。

彼女はビックリしたのか体をビクつかせた。

「野郎ども、勇者様を街まで案内しろ。」

「 はっ！ イエッサー！ 」

「何だ！？ 何をするともりだ！」

「……」俺は男共に捕まってしまった。

「これから勇者様をお城まで連れて行くんですよ」

はあー？ 何を言つてゐるんだこいつ等はー

「うわああああああああ！！」

俺は抵抗することが出来ず、連れて行かれた。

「あ、勇者様……お名前を聞けませんでした」

「手荒な手段で連れて来てしまつてすまんな。ワシがこのアクラの

王様じや

RPGにいそな王様だ。

「冠をかぶり、赤いマントみたいな物を身につけ、血のひけた
「さつそくで悪いんじゃが。魔王退治をしてくれないかのう」

「……何を言つてゐる糞ジジイ」

「貴様こそ何を言つてこむ？」

「まあ、落ち着くのじや。いきなりの事で、迷惑しているじやねん。

答えは明日でよい。今日はじつは済まつていきなされ」
俺を無視して話を進んだ。

ああ、RPGの主人公もこんな感じなのだらうな。

「豪華なのな」

そこにはテレビや漫画でしか見たことがない料理があった。
フルコース

「遠慮なく食べてくれ

遠慮も何もこんなに食えねえよ……。

「ちなみに魔王退治をしてくれるのなら、いつこの暮りしを約束するぞー」

悪くないかも、って思つてゐ自分もいるけど。
俺には魔王を倒す術がない。

もちろん勝つ術だつて。

俺は過負荷^{マイナス}、勝てるわけがない。

そもそも勝つのはどうの昔に諦めた。

「王様よ。俺一人で戦うのか？」

「いや、もちろん仲間は手配しておる」

「ほー、それは使えるんだろうな」

「もちろんんじや」

「じゃあ俺の代わりにそいつ等を行かせな」

「それは無理じや、勇者であるお主が行かねば魔王は倒せぬ
「だから俺は勇者つて呼ばれるほど凄いやつじやない。それに入
人で状況が良くなるんだつたら、俺は神か何かか？」

「そうじやな。お主は神に選ばれし者」

「じゃあその神の目は節穴だらけだ。眼科に行くことをお勧めする
ぜ」

「でも挑戦するだけ挑戦したらどうかのう?」

「残念ながら命が惜しいのでね」

「お主は偉いよ」

王様はいきなりしんみりした。

しんみりつていうか真面目になつた。

「前に呼び出された勇者は選ばれただけで浮かれ、魔王の前では一
撃で死んだ」

「それじゃソイツを選んだ神はクソだな。つつーことで俺も一撃で
死ぬと思うぞ?」

「でも君は落ち着いている」

「ただ状況が飲み込めないだけだ。いきなり異世界に連れてこられ
て」

「むわ。異世界とな」

？ 何が気になるんだ？

「君は異世界から来たと言つたな」

「ああ、言つたな」

「…? 例外じゃ。普通はこの世界の住人で勇者が決まるの。お主は異世界から……異例じゃ。もしや本物の勇者かもしれん」

……異世界から来るつていうほうが王道だけどな。

「お願いじゃ！ 魔王を倒してくれ！」

おこおこ……下下座までするか？

仕方ない諦めるか……。

「おい、顔を上げる」

「それじゃあ

「

「条件がある」

「叶えられるなら」

「まあ、仲間だな。それと僕に防具、それと武器をくれ。丈夫で強いやつ。それと書斎みたいなのはあるか？ この世界の情報がいっぱい書いてある」

「ああ、それだけでいいのか？」

「もちろんだ。まあ、勝つたあかつきには金とかも貰いつ

「それぐらいお安い御用じゃ！」

「交渉成立……」

「じゃあ、俺はここの引き受けむのか、魔王退治は数日後つてこいで」

俺はさっそく書斎に入った。

この世界のことを調べるために。

まずは……この本か。

えーと『勇者になるための本』。

……これはいいや。

次々……『魔王の倒し方攻略本』

これで倒せたら勇者はいりません。

「これだ」

『子供が学ぶ歴史』

これだつたらこの世界に来た僕でも理解は出来るだろつ。

この世界は三つの勢力がある。

その三つの勢力はよく争つていた。

その争いの中で生まれたのが“魔法”や“魔術”。

そういうた、まか不思議な能力だ。

その不思議な能力が生み出されたと同時に“魔物”が発生した。いつたいどこから現れたのか。

今でも不明。

でも“魔王”と呼ばれる者が引き連れてることだけは判明。

今では三つの勢力が手を組み魔王退治をしている。

大まかに読んだけど、大体のことは分かつた。

……男の子なら分かつてるよね。

魔法か。

使いて。

めっちゃ使いて。

俺は本を読み終わると同時に王様のところへ向かっていた。

「（バンッ！）

ドアを豪快に開け王様を呼ぶ。

「な、何事か！？」

「いや、大した用事じゃないけど。一つ頼み事がある」「王様と話していたのだろうか女性3人が僕を見る。そのうち一人は見たことがあるような……まあ、いつか。

「王様を俺に魔法を教えてくれ」

「魔法とな？ まあ、いいじゃろ？ お主の世界には無かったのかのう？」

「ああ、なかつた」

「まあ、落ち着くのじゃ」

「何を落ち着けというのだ。

魔法が、魔法が使えるって男の子の夢だぞ。俺はずつと前に諦めてた……というか現実を見て魔法なんてないつて決めつけたけど、この世界にはあるんだぞ！ 落ち着けるか！

「その前に自己紹介、じやん？」

「ん？」

「私ミラン・グリフォードです。以後よろしく」

「？？？ あー、よろしくお願ひします」

なぜ敬語になつたのかは置いといて、凄い美人さんだ。モデル体系とでも言うのだろうか？

長い黒髪も似合つてゐる。

それでいて殺氣を放つてゐる。

たぶんこれのせいで敬語になつたのだろう。

「わ、私セイリア・イーセスです。よ、よろしくおねがいしまふ。あ、噛んじやいました……」

「こちらは結構背が低めの優しそうな女の子。ん……。

「会つたことある？」

「え！？ 忘れたんですか？」

「ああ、物覚えが悪いからね」

「ほら、昨日草原で話したじゃないですか！」

あー、はいはい。
思い出した。

「最初に俺を勇者って言つた子か」

「最初か分かりませんが、たぶんそうです」

「ほー、あの子か。

「ねえねえ、ボクだけ自己紹介をさせないのかな?」

「あ、ごめん」

「いいよ、ボクの名前はエミリア・セシル。一応男だからよろしくね」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

ボクとセイリアもちろんミランを含む三人は黙り込んでしまった。
そしてミランから感じてたオーラはまったくない。

「「「おとこ?」」」

「それがどうかしたかな?」

たぶん俺達一緒のことを考えてるね。

「ま、まあ、よろしく」

「男同士よろしく~」

顔はどう見ても女の子。

背はセイリアと同じくらい……。

男の娘……?

「まあ、脱線したけど。魔法教えてくれつー!」

「教えるとしてもワシジやなくて、彼女達じやよ」

「へつ?」

「魔王退治のメンバーじやよ」

「つーことらしいです。」

「他人事みたいに言うな?」

「いやいや、他人事だし。」

「だって俺役に立たないし。」

全て三人任せるし。

「じゃあ使えない勇者ですが、よろしくお願ひします」
マジで使えないから本気で頭を下げる。

「いやいや、そんな謙遜されなくとも」「も」

セイ（セイリア）がフォローしてきた。
「残念ながら俺は魔法すら使えないんだ」

「で、でも……」「で、でも……」

「ちなみに元の世界でも勝つたことなんて一度も無い」

「あのう、王様」「あのう、王様」

「何じや？」

「本当に勇者はこの人なのでしょうか？」

「勇者じやめ、ワシの直感がそう言つておる」

「そうですか……」

「いやいや、本当は勇者様強いんでしょ？ 魔法抜きで」「魔法を抜いても俺は弱いぞ？ 犬にも勝てないからな」「勇者様ひ弱です……」

「あ、勇者様とかお堅いのなしね

「じゃー、つて名前は？」

「あ、そういうえ自分で紹介してなかつたな。俺の名前は桜島幸路」

「さくらじゆきじ？ 珍しい名前だね」

「そうか俺達の世界じゃ普通だけだな」

「じゃあコーくんよろしく～」

「そのコーくんって俺のことかな？」

「ちなみにセイリアはセーちゃん、//ワシナホーちゃん//」

「ゆ、幸路さん、よろしくお願ひします」

「では、私は幸路様とお呼びしますね」

「結局さまは付けるんだね」

あ、そうそう。

「じゃあ、さつそく魔法を教えてくれ!」

「ええ、いいんですけど。私は教えることが出来ないのでそちらのセイリアに聞いたほうがいいですよ」

「ボクも教えるのは無理かな?」

「わ、私ですか? 自身がありません……」

「大丈夫だよ、自身を持つて」

勇気をつけさせるためセイの頭を撫でた。

「はう……」

何かセイって妹って感じがする。

んでミランが姉。

「ミミ（ミミリア）は……弟? 妹? ビッちだ?」

「魔法は簡単ですよ。だからこの世界の人なら無意識に魔法を使うことが可能ですね。幸路さんにとって難しいか分かりませんが」
あれか?

日本人が日本語を覚える。

でも途中から英語を覚えようとすると難しい、みたいな?

ちなみに俺は英語が凄く苦手だ。

「まあ、最初は基礎魔法を勉強しましょ」

「? 勉強すれば使えるの?」

「まあ、そうですね。頭で理解しちゃえば簡単です」

「んで、この本を読めばいいと?」

「そうです」

「むう……何でこの世界の文字が日本語なのか? そつこいつシッ」

「ソウシツシッ」

「ソウシツシッ」

「ソウシツシッ」

「まあ、そんな“何か”を打ち出す魔法。

あとは『回復』『攻撃力強化』『防御力強化』。

補強能力だな。

ちなみに無意識で回復する能力もあるらしい。
んー、何を覚えよう。

「なあセイ」

「ふえ？ セイって私のことですか？」

「ああ、オススメの能力つてあるか？」

「オススメですか……これなんてどうです？ 初心者でも簡単に覚えられますよ」

「じゃあこれを練習しようかな」

「あ、あのう」

「ん？」

「これプレゼントです……」

「顔を赤くして、もじもじしながら俺に渡してきた。

……石？

「それは魔法石ですね。自分の魔力を倍増するための石です。よい物だと200万とかしますよ」

「ほー、ありがとうなセイ」

「はう……」

「ありがとうの印に頭を撫でた。

「炎の玉のイメージ……」

「イメージ……イメージ……」

「イメージ出来んつー……」

「はうつー……」

「あ、ごめん」

「いやいや、よかつたらお手本を見せましょーか？」

「ああ、本物を見せてもらつたほうがイメージしやすい」

セイは杖を持つて立ち上がった。

「ん？ 杖つて必要かな？」

「いえ、私は魔法や魔術を専門とする魔術師ですから。剣とか苦手なんですよね」

魔法や魔術ね

って魔法と魔術ってどう違うんだ？

その端で少し

「それで魔力をあげる杖を使つてるんですよ」

俺つて何の武器を使つのだろ？

「じゃあやりますよ、見ててくださいね」

そういうとセイは前を向き、手を前へ突

次の瞬間、炎の弾が一瞬にしてできた。

」のよくな炎をイマー シして 次は

「おおとおの強は遠くまで飛んで

「うう」

俺は由宇さす。

生魔法だぜ。

カッコいいね！

「じゃあ俺だね」「

イメージ。

そういうもののセイのイメージだ

全てを燃やす紅蓮の炎

1

でも感激だ！

「お、番み込みが昇いですね。流石幸路さんですー」

今田は「炎弾」・「水弾」・「無意識自然回復」・「攻撃力強化」

無意識自然回復は、まあ、無意識的に自然回復するって魔法だね。
まだ意識的には無理だ。

次の日。

魔法の勉強をした俺はミランとエミと一緒に武器を選んでた。
「んー、俺つてどの武器も使つたこと無いんだよね」
因みに帰宅部です。

竹刀なんて触つたこともあります。

あるいは修学旅行で買った木刀ぐらい。

「ミランとエミつて何の武器使つてるの?」

「私ですか? 私は一つの剣です

「ボクはねーこれだよ」

エミが手にしているのは小刀と手裏剣数個とクナイ数個。

「ボクが得意とする魔法は“加速”だからね

「ほー」

加速だから小回りがきく小刀ね。

「まるで忍者だな」

「にんじゃ? 何それ?」

「私も知りませんね……」

「ん。忍者つてのは俺の世界の隠密行動を主体とする集団かな?
まあ昔の話だけど」

「でもボクは隠密行動なんて苦手だけどね」

「何となくは分かってたけどね。」

「それで幸路様はどの武器にするのですか?」

「んー迷つ……」

「まあ、単純に剣という選択もありますが

「単純に剣か……」

「RPGとかでも主人公は剣だけじさ……」これは違う物を選びたい

よね。

とりあえず剣を手に取つてみた。

「重つ」

「じゃあこれなんてどうですか？」
「残念ながらこの重さの物で戦うことが戦う」とが出来ません。

ん
？

「まあ、ひとまずこれでいいかな？使い方を教えて」「簡単ですよ。この銃に魔力を注げばいいだけです」

「んじゃ一試し撃ち」

「魔力を注ぐつと
そこにある大きな壁に銃口を向ける。

魔力が銃に吸い取られる感覚。

「（ズガニッ！）」

「（大#大#……）」

「何で一人とも黙つてるの？」

「いや、いや。この壁は頑丈な魔法石で造られてるんですよ。だから魔力を使つた攻撃で壁にひびを入れるのは難しいんですよ。できるのはセイリアぐらいですね」

「セイって凄いやつなの？」

「ええ、結構な有名人です。魔法を操る人たちの中でも最高ランク。

「マジですか……」「……」

「では魔王退治に行つて来ておくれ」

ここで過ごして一週間。

そんな短い間に修行をして魔王退治。
この世界の魔王は一週間修行すれば倒せる雑魚か？

「んじゃ、いっちょ逝つてくる」

「逝くんじゃないぞ~」

そんな会話を済ませ、魔王のいる何とか城に乗り込む。
いや~、歩いて三十分つて何だよ……。
しかも一週間襲つてこないつて……。

本当に魔王か？

そんな疑問がずっと頭の中でループしてた。

「この魔王はバカですが力は強いです。油断しないでくださいね。

幸路様」

「ああ……」

やっぱバカなのね。

予想通りなのか、お城の門には武装した門番が二体いた。

「いや~、あちらさんもやる気満々だね」

「じゃあ、ここはボクと

「私にお任せください」

エミとミランが前へ出た。

「ボクの速さについてこられるかな？」

小刀を構えたエミは加速を開始した。

門番はエミの身長を超える大斧を真正面に振り下ろした。

エミはそれを高速で避け、門番の後ろに回り、背中を小刀で刺す。
「ボクに背中を向けたら終わりだからね」

「わー、可愛い（？）のに残酷だー。

つつても、この状況そんな事は言つてられないんだよね。

一方ミランはもう一体の門番の相手をしてた。

ミランは正々堂々と真ん前から攻めてた。

ミランは『攻撃力強化』で自分の攻撃力を高め門番と戦つていた。
大きな斧を片方の剣で防ぎ、もう一つの剣で門番の眉間に刺した。

「敵に容赦ないね。ミラン」

「ええ

「それじゃあ、セイ。扉を派手にぶつ壊して

「は、派手ですか？……了解です」

セイは杖から物凄い炎をだして扉を壊した。

そして城に入つて、とりあえず一言。

「勇者様御一行で～す。魔王を殺しに来ました～」

一応宣戦布告。

相手の家に入るときは挨拶をしなくちゃね。

「ちょ、幸路さんっ！ 何を言つてるんですか～！」

「ん～、でもボクはこういうの好きだな～」

「私はどちらで構いません。どうせ後で気づかれるのですから」

「じゃ、とりあえず乱闘開始つづーことで。みんな頑張つて勝つてね。俺は頑張つて負けるから」

「やあ、魔王」

「何だい？」勇者

「一応感想として。人間なんだな」

「いや、僕は魔物だ。人間の姿を借りてているだけだよ」

「そーなの」

絶対に瞬きを許されない。

した瞬間、相手の攻撃が飛んてきて死ぬかもしれないから。まあ、俺が勝つ可能性は0%に等しいんだけど。

「魔王」

「何だ？」

「お前に質問だが。俺は何に見える？」

「勇者に見える」

「そうですか……。

「お前の目は節穴だ。一回めんたま引っこ抜いたらどうだ～？」

「最近の勇者は汚い言葉を発するんだな」

「残念ながら綺麗～ことだけを並べても勝てないのでね」

「現実を見ているんだな」

「いー や。俺は現実から逃げてるんだ」

「ほー、勇者らしくない」

「そうや、俺は勇者らしくない。だから俺は勇者じゃない」

「では、何だと言つのだ?」

「“過負荷”とでも言つておこつか」

「では過負荷よ。僕の力の前でひれ伏すがよい」

黒くて黒くて黒い真つ黒な弾。

「なあ魔王」

「怖気づいて、命乞いか?」

「ん、いや諦めたんだよ」

「む、何をだ?」

「お前を自分の力で倒すことを

「ほほー、他力本願か?」

「いや、それとは違う。俺の過負荷を使わせてもらいつ^{スキル}」

「スキルだと……? 残念ながら魔法なら聞かない!」

魔王は黒い弾を俺に向かって撃つた。

「無理無力」

俺の過負荷は“無理無力”。

相手のやる気を無くさせる、絶望させるなどの効果がある。

中学二年生のときに発動した二つ目の才能。
そして初めての過負荷^{スキル}

「これ以上やるつもり」

「いいえ……諦めた。お前に勝てない……」

「それじゃあ死んでよ」

銃口を魔王の頭に向け。

重いはずの引き金が、軽く感じた。

「いやー！ 流石勇者様！ 魔王を独りで殺してしまったんでー！」

「本当ですよ。幸路さんどんな技を使つたんですか？」

「んー、内緒だよ

「ボクも気になるなー」

「私も気になります」

内緒にする理由はないけど、一応内緒ってことにしておく。
んで、流れだと、魔王を倒して、元の世界に返れる。
つていうのが流れのはず。

「それじゃあ、残りの魔王もよろしく頼みますぞい。 勇者様

………… ハア？

「What？」

「因みに勇者様のお城は立てたぞい。だかた今日からそちらで住んでくれても構わん。使用人もつけたぞい」

「どうやらこの世界には魔王が何体もいるらしいです。

「それじゃあ、ボク達もその城で暮らすのかなー？」

「そうじゅのう……まあ、それが一番じゃろうな」

つーことで、その城には俺・ミラン・セイ・エミ住むことになりました。

残念ながら俺が思つたとおりには行かないね…………。

最初は無力な才能で（後書き）

<http://profile.ameba.jp/kurenai/nohibari/>

アメーバー始めました！

一応毎日更新中！

こつちでは140字小説ばっかり書いてます
気軽にアメンバー申請送つてね？

修行のあとほほに褒美の

「次こそっ！」

走り出し、両手で握り締めた木刀を前に振る。

その一太刀をミランが軽々と受け流す。

「まだまだっ！」

体制を立て直し、横へ木刀を振る。

ミランは片方の木刀でそれを止め、片方で俺の頭を狙う。

俺はそれをギリギリのところでかわして、後ろへ下がった。

「ハアハア……」

息が乱れる。

そりや一時間以上ミランと修行をしているのだから。

今している修行は剣術だ。

ちょくちょく休みながら修行をしているが、すぐに息が乱れてしまう。

それに今まで俺の攻撃はミランに当たっていない。

一週間前から。

「幸路様！ 集中です！」

ミラン師匠からの喝。

集中……。

少しずつ息を整える。

「はあっ！」

渾身の一太刀。

でもミランは軽々と避けた。

そしてミランが俺の背後に回り、俺の首に木刀を当てる。

「参りました……」

ミランが俺の首に木刀を当てるといふことは修行終了の知らせだ。つまり俺の負け。

一週間前まで木刀すら触らなかつた幸路様ですよ。これだけでき

れば上等です

「お世辞ありがとうございます」「
ゆ、幸路さん。お疲れ様です」

「疲れ~」

セイとHIMIが来た。

そしてセイが俺にタオルを差し出した。

「ありがとう、セイ」

「い、いえ……」

何か恥ずかしがつてているセイを見ると頭を撫でたくなる。
これは妹を見る兄の気分か?

「ボクからはこれ」

「お、水か。HIMIもありがとうな」

「ボクもなでなで~」

「はいはい」

この男から女か分からん性別のHIMIの頭を撫でる。

仕草は女の子っぽいのだが……どっちなんだ?

「こ、これミランさんの分です」

「あ、私の分まで用意してくれたんですね。ありがとうございます」

「もちろんボクも持つてきたんだからね~」

ミランにもタオルと水を渡した。

「ふ~、疲れたー。午後からは魔法か?」

「あ、はい。今日は『回復』が意識的に出来るようになつましょ~」

「了解。セイリア師匠」

「師匠なんて……」

また顔を赤くして下を向いてしまった。

「ねえねえ。何でボクだけ師匠じゃないの?」

「いやいや、俺からしてみればみんな師匠だよ。HIMIリア師匠」

「お礼に『加速』を教えるよ~」

「ありがとー」

そんな感じに午後は終わった。

午後からは魔法の修行。

まず『炎弾』。

一応少しの集中で炎弾を扱えるようになつた。
だからすぐに炎弾を使える。

「ま、回復は置いといて。これからやるか
そこに書いてあるのは『電雷獣』。

まあ、雷の獣だ。

難しいけど強い。

つか本音を言えばカツコいから覚えたい。

「じゃあお手本見せますね」

地面に魔方陣がでて、そこから雷の獣がでた。
か、かっけー。

「ゆ、幸路さん？ 目がキラキラ光つてますよ？」「
いやー、カツコいいじゃん。

現実ばっか見てた俺にとつてファンタジーは凄い世界なんだよ。

「んじや、これを召喚すればいいんだな」「
集中……。

魔方陣。

雷。雷。

獣。

「（バチツ！）（バチバチツ！）」

「いつつ！」

「だ、大丈夫ですか！『回復』！」

雷に撃たれた？

「だからこれは難易度が高いんですよ。失敗したら痛いですし……」「集中力が足りなかつたかー」

「それもありますが。経験不足かもしれませんね。もっと基礎のところからやりましょうね？」

「まあ、師匠がいっなら……じゃあ……これだ！」

『水龍』。

「ハア……幸路さん。わつきの話聞いてましたか？」

あー、また難易度高いのね……。

「じゃあ無難に『回復』かな」

「そうですね

午後の修行終わりっ！

とりあえず『回復』は使えるよくなりました。

「ん、じゃあ、俺風呂入ってぐるわ」

「あ、分かりました。『飯前に上がつてくださいね

「りょーかい

とりあえずお風呂へ直行。

「んー、いい見ても広い」

簡単に言つと温泉。

難しく言つと温泉。

間をとつて温泉。

まあ、温泉なみの広さだね。

この前王様にこの城貰つたけど、広すぎだぜ……。

最初らへんなんて道に迷つて泣きそつた……。

いつもセイの『探索』で助けてもらつてた。

ありがとうセイ……。

君がいなかつたら俺は知らない部屋で独り死ぬところだつたよ……。

「ふうー、落ち着く……」

一人で温泉つてあつちの世界じゃほとんど無かつたからな。あー、のんびりするー。

一人の温泉つていつのもいいなー。

毎日

『さー、男同士一緒に入るうな～』

とH/Mが言つて。

『そ、それはダメです～』

という流れで結局ゆづくりできないんだよね。

（ポチヤンツ）

「！」

誰か……いる。

一応身のために桶を装備……。

（ポチヤンツ）

「そこだ！」

思いつきり桶を投げる！

ソイツは手刀で桶を弾く。
そして物陰に隠れた。

「ゆ、幸路様！ 私です！」

聞き覚える声。

でも今はオドオドしてる。

「そ、その声は……//」

「え、ええ……」

「な、何でここ……？」

無音の状況に耐え切れないから理由を聞いた。

「そ、それはこっちの台詞です！ 私が温泉の入った数分後に幸路様が入ってきたのでしょうか～」

「そ、そうなのか……すまん。でもだったら最初に言つてくれればよかつたじゃないか」

「い、言おうとしたんですよ。でも言つタイミングが……」

「……」

「……」

無言が耐え切られん。

「じゃ、じゃあ、たきにあがりますね……」

「あ、ああ……」

「こ、こっち向かないで下さないね……」

「わ、分かつた……」

「あー、たぶん顔が真っ赤だな……。
絶対に前が向けない……。」

「（カチチャンツ）」

「ハア……やつと出た……。」

「それにしても緊張したなー。」

……。
……。
……。
ハア。

この後、エミにからかわれて。
セイに色々追求された。

それはいわゆる大能さ

「『加速』」

エミが小刀で大きなモンスターと戦っている。
高速でモンスターを切り刻む。

最後に強い一撃を切り刻み、モンスター蹴つてモンスターとの間を空ける。

「『雷纏』」

くない数個に雷を纏わせモンスターに投げる。
エミが指を天に向けた。

「『落雷』！」

くないが当たったモンスターに落雷を落とした。
「さつすがエミだな……」

エミの強力な加速の後、雷の連続攻撃。
エミの得意技は加速と雷かな？
加速が得意だつてことは分かつてたけど。
雷は聞いてなかつたな。

「『氷華』」

氷の花があたり一面に咲く。

もちろんモンスターの足は凍らせられて動けない。

「『氷柱』」

モンスターの真下から氷の柱が発生する。
モンスターは宙に浮かんでる。

「『氷花弁』」

氷華の花弁が宙に浮かんでるモンスターに突き刺さる。
氷系の魔法でモンスターと戦つてているのはセイだ。
流石と言うべきか魔法に関しては最強だ。

「『攻撃力強化』」

ミランが攻撃力を上げてモンスターに斬りかかる。

続いてモンスターを蹴り間合いを少し開け、蹴った反動でモントーを真つ二つに斬る。

刀の扱いにだつたら//ランが一番だな。

「そんじゃ、俺もやるかな」

今日はモンスター狩り。

生態系を崩さないよう、害を及ぼすモンスターだけを倒す。

「『炎弾』」

まずは炎弾で怯ませる、そして一気に近づき刀で斬る。まあ、当然まだモンスターは死なないわけで。

「（力チャヤツ）」

モンスターの頭に銃口を向け撃つ。

これが俺の戦い方。

魔法で怯ませ、刀で傷をつけ、傷ついて動けないモンスターの頭を銃で撃つ。

「あ、ずっと気になつていたんですけど、いいですか？」

「ああ」

セイが俺に質問してきた。

「どうやって魔王を倒したんですか？」

「私も気になります。武器もまともに扱えてなかつたのに……どうやって倒したんでしょう？」

「まあ……裏技かな？」

「裏技ですか……」

「ん~、気になるから教えて！」

HIMIも話の輪に入ってきた。

「まあ、隠すような」とじやないしな

「俺の才能とでもいうのか。俺は昔から“諦める”ことだけは得意だつた。そしていつからか“過負荷”^{スキル}つづりもんが使えるようになつた。名前を『無理無力』。これを受けたやつは全てを諦める。まあ、魔王にこれを使って俺に勝つことを諦めさせ俺が銃で殺してわけや」

ちなみに心を冷静にしている状態でしか発動できない。

「ほえーー凄い魔法だね。セイは使える?」

「い、いえ……」

「これは魔法じゃなくて過負荷」^{過負荷}

「幸路様の世界にはそんなものが……」

「そうでもないよ? みんながみんな持つてるつていうわけじゃないし」

まあ、俺が持つ才能は“これだけじゃないけどね。

「まあ、はつきり言つてしまえばこれは反則。だけどな俺は使わせてもらひ。だつて俺は過負荷だからな」

「ボクはどっちでもいいよ。正々堂々も卑怯も勝てばいいんだしね

「私も同意権です……」

「私もです」

「あら? //ランって正々堂々つていうイメージがあつたんだけどな……?」

「……それに正々堂々つていうのも好きじゃないし」

「ん? ハミ何か言つたか?」

「え、あ、何も言つてないよ

何だ俺の勘違いか。

「(バンッ!)」

扉が豪快に開けられた。

ここでは見ない服装……王様の家来か?

「どうしたんだ?」

「申し上げます! 勇者様がさきほど倒されていたモンスターの親玉が出てきました! 推測ですがあと一時間ほどでアクアに着き暴

れまわると……」「

「そーか」

仇ね……。

「んじや、最後の始末をしてきますか

「了解です」

「わ、分かりました

「では行きましょうか

馬に乗つて親玉のところまできた。

ちなみに馬に乗る練習もしっかりしています。

「うわー、でつけー」

体長4m?

「腕がなりますなー」

「まあ、楽勝じゃない?」

「セイリアがいれば楽勝ですね……」

「まあな

セイはもしものためにアクアで待機。

「でも俺を抜かして、二人でもいけるだろ?」

「どうでしょう……私は大型モンスターとはほとんど戦つたことがないですし……」

「ボクもかな? 大型は珍しいし」

「ん。じゃあ俺も参戦かな?」

「やりますよ」

その言葉を放つと同時にミランは走り出す。

「『攻撃力強化』」

まずは補強魔法で強化。

「はああ!」

ミランは親玉の足を斬りかかった……が。

「ハア!? ほとんど無傷か」

「一応様子見として五割の力でやりましたが……無傷ですか……」

それでもミリオンの5割は強い。

俺との練習は三割ぐらいだしな。

「じゃあボクの番! 『加速』『雷纏』!」

小刀に雷を纏わせ、高速で親玉に斬りにかかる。これでも小さな傷しか開いてない。

「ありやりや? たつたこれっぽっち?」

「だな」

「さてどうやって倒しましょうか?」

「まあ、さっそく反則使つづ!」

「そうしましようか」

「『無理無力』『諦める』』

親玉は持っていた金棒を落とした。

「これで終わりだ」

親玉の頭を銃で撃つた。

「!?

「硬い……。」

「それでは私が!」

凄い殺氣があたり一面に放たれる。

「『炎斬』」

炎を纏わせた双剣で頭を狙う。

「くつ!」

それでも親玉は死ない。

「さてどうしたものか……」

俺の過負荷を使ったとしてもこの硬さを変えることは不可能だ。

「ボクがセーちゃんを呼んでくるから、時間稼ぎしてて!」

「了解しました!」

「勇者の底力見せてやんよ」

まあ、力なんてないけど。

「では幸路様は後ろで援護射撃をしてください。私は頭蓋骨を壊します」

「了解だ！」

相手は諦めてるとはいって、体が硬い……。

まあ、俺は援護射撃ね。

腰から一拳銃をとりだす。

「せめて動けなくなるまで足を撃つてやるよ」

『無理無力』には時間制限がある。

確か……一時間かな？

三十分後。

「ゆ、幸路さん」

やつとセイが来てくれた。

「こいつの硬さは異常だ。どうにかならないか？」

「えーと……任せてください。たぶんいけます！」

「おお、頼もしいかぎりですな～。」

「では、『炎爆』」

あ！ そういうことね。

外からの攻撃がダメなら内からね。

セイの炎爆は親玉の口から入り、爆発した。

「まだまだですよ。『紫毒花』」

ん……初めて見る技だ。

倒れてる親玉の目に何かをした。

「今のは毒技です。一瞬で身体中に毒が回ったと思いますよ」

スゲー、流石最強。

俺も過負荷なしで戦えるようにならないとな。

蛙とか蜘蛛とか絶滅しちゃあばいこなれ（前書き）

ええ、はい

サブタイトルが意味分からないうことになつてますね
一応意味はあるんですよ？

小説の中にでてもます

そして本当に蛙とか絶滅しちゃあばいこなんだ！

蛙とか蜘蛛とか絶滅しちゃえばこいつよ

「んで、これが今日の依頼か？」

「ええ……今日も頼りにしますからね」

「まあ、頼りにするなら俺より優秀なメンバーを頼りにするんだな」

俺は歩き出し後ろにいる王様に軽く手を振る。

さて、修行開始。

「えー、今日のクエストは『螺旋城の大蜘蛛駆除』だつてさ」

「つ！」

「ん？ セイどつかしたのか？」

「む、虫は大の苦手なんです……」

「まあ、好きなやつはいないわな」

そういう俺も虫は好きじゃない。
つていうか嫌いだ。

とくに蛙とか蛇は特にな。

「じゃあ、セイ。今回はお留守番するか？」

「い、いえ！ 行きます！」

「そ、そうか？ じゃあ、頑張ってくれな
は、はい！」

「」

「こ」が螺旋城か……

まるで蜘蛛の巣だな……。

「こ」の蜘蛛の巣が螺旋状になっていたから螺旋城と呼ばれるようになつたんですよ

「ほー、説明ありがと。//ラン」

「いえいえ」

さて、簡単な話セイに頼んで炎系の魔法で焼いたほうが凄く速いのだけれど。

本人はびくびくしてて使い物にならない……。

「な、なあセイ。よかつたら今から帰るか？」

「わ、私なら大丈夫です……ぐすん……」

「いや……泣きながら言われても……なあ？」

ミランとエミにアイコンタクト送った。

「たしかに幸路様の言うとおり、無理はよくないですよ？ 誰にでも得意不得意はありますし」

「そ、そうだよ？ ミランも幸路も言つてるんだし。無理しないで

帰ろ？」

みんな頑張つてセイを説得中……。

十分後……。

「ハアハア……」

「ゼエゼエ……」

疲れた……説得失敗。

「まあ、いい。やるぞミラン！ エミー！」

「はい！」

「了解！ 『加速』！」

さつそくエミは加速状態になり蜘蛛の巣を斬る。

「硬くはないけど、全部斬るとなると無理だね」

「それじゃ『炎弾』！」

俺の炎で燃やす！

「つち！ 俺の炎じや燃えないか！」

「それに大蜘蛛が出てきませんね」

「ん。まあ、まあ蜘蛛の巣を攻撃してれば怒つて出てくるんじやないか？」

「そうかもね」

三人とも刀を手にして蜘蛛の巣を斬る。

「んで、これが大蜘蛛？」

「え、ええ……予想以上です……」

「う、うん。ボクもこんな大きさだとは思つてなかつた……」

目測で横が8m縦も8m。

足の長さも結構長い。

「おしおし」

「了解」

「攻擊開始！」

『攻撃力強化』をしたミランが突っ込む。

二つの鉗が大蜘蛛の腹(?)を切り裂き、腹を開いた

雷を纏わせたくない数個を腹に向けて投げつける。

『雷落』！」

「ブオオオオオオオオオオ！」
エミが必殺の連續コンボを繰り出す……が。

まだ生きてやがる。

わうすが虫だ、じぶとい。

ପାତା ୧୦

「ルセウス」

予想通りなのか俺とセイ以外は拘束されてしまった。

「これ硬いです……」

「ああ、俺がさ

『どうやって倒すかな……』『無理無力』を使おうかな。

そう思つたところで最悪の状態になつた。

「どうしたんですか！」
幸路様！」

「蛙が！ 蛙がいる！」

蛙の世いで平常心を保てない。

そのせいで、無理無力が使えない』

經文總合

桂はこの兼用。

絶滅しろとも思つ

方方一

その名のとおり無数の

一斉発射！」

ふうふ
あ、やだえ
魔力使ひ黙こゝに

「こんどこそ絶体絶命。

ハア…俺死ぬのかな?

続いてセイのところまで行く。

そして大蜘蛛が糸を吐こうとした瞬間。

いきなりせんは起きて、畠の前に立つて「蟻虫に驚き

無数の魔法陣。

それらは大蜘蛛を囲む。

「『魔炎業火』！！！」

それは確か……最上級魔法！

しかもそれを大量に使用……。

こいつはどんだけ最強なんだ。

あまりの熱さなのか大蜘蛛の糸は溶けた。
もちろん大蜘蛛はとっくのとうに黒コゲだ。

「セイ！ 攻撃を中止して帰るぞ！」

「え？ あ……ごめんなさい！」

「いや、いい。俺達は助かつたんだ」

「よかつたです……」

「それじゃ帰るぞ」

「りょ～かい」

「分かりました」

今回のクエストでセイがどれだけ最強つてのが十分分かった。
セイだけで魔王を殺せるんじゃないだろうか？ とも思った。

パーティーを抜け出して

大蜘蛛を倒した（ほとんどセイが活躍）翌日、俺達はパーティーに参加させられた。

もう一回言おう。

参加させられた。

俺はこういう派手なのが華々しいのは苦手なのに。

王様が招待してきて、それにエミが乗っかって、セイとミランを仲間にして、多数決で俺が負けた……。

しかも俺初めてスーツなんて着たぜ……。

この世界はまだよく分からぬ。

元いた世界と同じようなところがあつたり。
なかつたり。

私服は違うのにスーツとかドレスは元いた世界と一緒に。
電気はないけど豆電球に似た魔道具がある。
料理も日本で見たことがあるやつだ。

「勇者様が主役なのですからきつとしてくださいね」

「ハア……」

このパーティーは大蜘蛛倒した祝杯だそうだ。
だつたら俺は主役じゃないじゃないか。

みんなでセイを祝つてやれ。

そう思つた瞬間、みんながセイを祝つてるのを想像してみた。
まあ、オドオドして半泣き状態だ。

簡単に予想が出来るな。

「さあ、このドレスはどうかな？ かな？」

「そう言つてきたのはエミだ。」

「どうだつて、まあ、可愛いんじゃないかな？」

「こいつ男だけど。」

「もつと正直になれよ」

「これ以上どう正直になれと」

「いや～『俺の物にしたい』とか『愛してる』とか」

「残念ながらお前が女だったら言つてやるよ」

「実は私……女だったんだ。確かめてみる?」

HIMIは俺の手を取り、自分の胸に手を当つようとする。いきなりの出来事で俺は対応できなかつた。

「……貧乳?」

「いやいや、ボク男だから」

「お前は結局どちらなんだ……女つて言つてみたり、男つて言つてみたり……」

「ボクは正真正銘男だよ? 今のは演技だけど。ねえ、ドキドキした? ねえ、ねえつてば」

男の胸触つて喜ぶやつがいるか……。

つていつのは半分冗談。

まあ、HIMIは性別は男だけど、容姿は完全に美少女だ。

HIMIが貧乳だと思えば……嬉しいかも。

HIMIには絶対にこのことは言わないけど。

「ゆ、幸路さん……」

ゴスロリといつのだらうか?

白がベースで少し黒が入つてゐる。

元いた世界で可愛い子ぶつてゐる奴等と違い、セイは自分を飾らない。

だから可愛い。

「に、似合つてゐるぞ、セイ」

なぜか俺は言葉がつつかえた。

「あ、ありがとうござります……」

「何それ! ボクとは違う反応だね!」

いや、だつてセイは可愛い女の子だし。お前は可愛い男の子だろ?

?」

「か、可愛い……」

「ほら！ 幸路のせいでせーちゃんの顔が真っ赤！」

「はあ！ 僕のせいなのか？」

「い、いえ、そうじゃなくて……」

「い、いや、幸路のせいだよ。言葉には気をつけるんだね！」

「う、うん……いつも気をつけてるはずなのにな……」

「そ、そんなに気を落とさないでください！」

俺らはしばらくそんなバカ話を続けてた。

それでもミランは来ない……。

「なあ、ミラン遅いな」

「うん、そうだね。何かあつたのかな？」

「え？ もう着替えを終わってるはずですよ。私と一緒に出てきたんですから」

「ん、じゃあミランは何でこないんだ？」

もしかして酔っ払いに絡まれたか！

「一応探すぞ」

たぶんミランだつたら簡単に対処できると思つたが。

「んじや、ボクあつちを探すね」

「そ、それじゃあ、私はこつちを……」

「じゃあ俺は……」

「気持ちは分かりますが、勇者様は動き回らないでくださいね」

「うおつ！ ビックリしたぞ、王様」

「それは失敬……」

「でもな……」

「勇者様は今回のパーティーの主役なのですか？」

「ハア……分かつたよ」

仕方ないから俺は中央に残る」とこした。

「勇者様は

「異世界つてどんな

「またこんど私が主催する

」

「

つるさいのは苦手だ。
もちろん質問攻めも。

「『無理無力』」

制限時間は一分。

その間に俺は人ごみを掻き分けパーティー会場から出た。

「人ごみは慣れないから好かない…………」

ある程度離れた部屋で俺はのんびりしていた。

今日は満月だ。

日本だつたら月見をするかな？

俺にはそんな習慣がなかつたけど。

今日は満月が綺麗だ。

俺は独りという空間で“寂しさ”を感じていた。

たぶんこれはこの世界で知つた感情だ。

いつも周りにはセイやエミそれにミランがいた。

最近は楽しいの時間がばかりだつた。

だからなのか、あいつ等がいなくなつたらと考えると寂しい。

手を伸ばせばそこに人がいる。

でも、いつかあの満月のように手を伸ばしても届かなくなるのか
と思つてしまふ。

俺の中ではいつの間にかあいつ等は大切な存在になつていたよう
だ。

だから俺は強くなる。

自分を、自分の仲間を守るために。

世界を救えるとは思つてない。

だから自分の手が届く人を守りたい。

たとえ手が届かなくなつても俺はあいつ等を守りたい。

「幸路様？」

「ん？」

着物を着た少女。

大人びた容姿で黒い髪をなびかせ俺の名前を呼ぶ。

「ここで何をしているんだ? ミラン」

「こっちの台詞ですよ。パーティーはどうしたんですか?」

「すっぽかした」

「予想はしましたが……」

「ミランこそ、何でパーティーに来なかつたんだ?」

「え、あ……それは……」

「それは?」

「着物を着たのは初めてで……恥ずかしくて……」

恥ずかしい……ね。

やつぱりミランも女の子だ。

いつもはきりつとした頬りになる人だけど。

こういう時は可愛い……。

「俺は可愛いと思う。ドレスよりミランは着物のほうが似合う」
「わ、私がか、可愛いですか……?」

「ああ、可愛いぞ」

ミランは顔を真っ赤にして下を向いてしまった。

「なあ、ミラン」

「な、なんでしょうか?」

下を向きながらミランが答える。

「力つて何だ?」

俺はミランに問う。

「誰かを傷つけるための力か? それともみんなを守るための力か

? 俺の経験上から言わせて貰うと正義を語つてる奴等は全員後者だな。悪役は前者。残念ながら俺は前者でも後者でもないんだよ。俺は自分を守るために力を使う。俺は弱い、弱すぎる。だから俺はこの過負荷で自分を守る。つつつても今は守るべき仲間が出来たんだがな……」

「私の力は

「

「（バンッ！）」

扉は豪快に開けられた。

「やつと見つけた！ 一人とも探したんだよ」

「そ、そうですよ。パーティー会場では騒ぎになつてしまふや。」

「そりが、じゃあ行くか」

「そうですね」

「ボクなんて何も食べてないよ」

「私もお腹が空きました……」

「ほらほら、一人ともさつれと歩く」

「は～～」

「では急ぎましょつか。主役が行かないと騒ぎは落ち着きませんし」

「だな」

「こんな日常が續けばいいと思つた。
こつまでも、こつまでも……。」

僕はやつぱり弱者でしかないんだ

改めて自己紹介。

俺の名前は桜島幸路。

箱庭学園の一年・十三組に属していた。

過負荷は『無理無力』。

黒神めだかに改心させられそうになつたとき、なぜか俺は倒れてこの世界に来てしまつた。

そしてなぜか勇者になつてしまつた。

正義感？ そんなのまったくありません。

世界を救いたい？ 俺がか？ はつきり言つて無理です。じゃあ何で勇者として戦つてるんだ？ 簡単な話だ。

楽しいからだよ。

RPGの主人公みたくカッコいいからだよ。

俺はあくまで過負荷だ。

あつちの世界じゃ主役どころか脇役にすらなれないからな。せつかくのチャンスどぶに捨てるようなことはしない。

だから楽しもうじやないか。

俺が勇者である物語を。

「それじゃあ修行開始つてな！」

俺が戦つてるのはスライム。

理由としては雑魚で俺の修行にもつてこいだから。

「『体力強化』！」

この前覚えた体力強化を使う。

振り下ろした刀がスライムを真つ一本にする。

スライムは飛び散つた。

「ふう……疲れたな……」

ざつと数えただけで百体近く倒した。

「そろそろ終わりにするか
異常だ。
イレギュラー

」

キングスライム。

スライム同士が合体したモンスター。
さつきのスライムの何倍も大きい。

「おいおい……」

キングスライムが空高く飛び跳ねる。
「ちょ、ヤバイって！」

残念ながらここには俺しかいない。

俺は本気で走る。

ギリギリのところで避けた。

「『無理無力』」

過負荷を使い諦めさせる。

さーて、どうやって倒そう……か。

ありえないだろう……。

俺の過負荷が無効化された……？

「つたく、一体何者だ？ このスライムは異常を起こしまくりじゃないか」

またスライムが飛び跳ねた。

俺は走つて逃げる。

「ぐあつ！」

だが避けることは出来なかつた。

そのまま俺はスライムの下敷きにされた。

ぐつ！

圧されて力が出せない……。

そのまま、俺は意識を失つた……。

「幸路様！」

私が駆けつけた頃には幸路様はキングスライムに下敷きにされた。

ぐつっと拳に力が入る。

私がついて行かなかつたから……。

「みーちゃん、自分を責めるのは止めな。今しなくちゃいけないことは幸路を助けることだよ」

「そ、そうですよミランさん。自分を責めても幸路さんは助かりません……」

「ええ、でも……」

「いいから！ いくよ！ 『加速』！」

エミリアが加速状態でスライムを斬る。

でもスライムはすぐに再生した。

雷攻撃をすれば下敷きにされてる幸路様が危ない。

「『炎弾』！」

セイリアは幸路様に当たらないように魔法を放つて。

「『攻撃力強化』！ はああああああ！」

私に力があれば、守れたはず。

力があれば、すぐに助け出し手当てをすることが出来る。

でも今の私は無力……。

ただ無力で何も出来ない、ただの人間。

『なあ、ミラン』

幸路様の幻聴が聞こえる。

朝聞いたはずなのに懐かしい。

とても安心できる声音。

『力つて何だ？ 誰かを傷つけるための力か？ それともみんなを守るための力か？ 僕の経験上から言わせて貰うと正義を語つての奴等は全員後者だな。悪役は前者。残念ながら俺は前者でも後者でもないんだよ。俺は自分を守るために力を使う。俺は弱い、弱すぎ

る。だから俺はこの過負荷で自分を守る。ついつても今は守るべ
き仲間が出来たんだがな……』

力……。

私は何で剣を振るう?

敵を倒すため?

全てを守るため?

自分を守るため?

いや、違う。

私は大切な幸路様を助けるため。

弱い幸路様を守るために剣を振るう。

最初は勇者様の護衛だと伝えられ城に呼ばれた。

第一印象は元気な青年。

だけど身近で見ていると違った。

とある部屋。

幸路様が満月の光に照らされてる。

幸路様は全てが終わつたかのような無表情。

だけど、どこか弱々しい。

そんな表情。

本当の彼は弱い。

ガラスよりも脆い。

そんな彼を私は守りたい。

彼は私達には見えない何かと戦つている。

私は幸路様を見えない何かから守りたい。

「大切な幸路様を守りたい！」

剣は桜の花弁になり消える。

「スライムごときが幸路様を踏みつけて良いと思つてはいるのか！」

「み、ミランさん……大丈夫ですか？」

「たぶん今のみーちゃんには周りの声は聞こえないんじゃないのか
な……？」

私は何も持たないでスライムに近づく。

「私が鉄槌を下してやるつ！」

桜の花弁が私の手に集まる。

桜の花弁は一本の剣に変わる。

長さは50mぐらいの剣。

キングスライムなんて簡単に真つ一つにできるぐらいの大きさだ。

「幸路様を踏みつけたことを悔いよ」

私はそれでキングスライムを横から切りつけ真つ一つにした。

「わ……」

「はわ……」

「ん？ お二人ともどうかしたんですか？」

「い、いや……開いた口が塞がらないというか……」

「何と言うのでしょうか……」

「凄かったね」

「わ、私もビックリしましたよ」

私もビックリしている。

だつて知らない技がいきなりできるようになつたんだから。

『幻影夜桜』……それが幸路様を守るための力。

俺は“俺”であり弱者だ（前書き）

少し時間があきましたが
どうぞ！

俺は“俺”であり弱者だ

暗い。

暗くて暗くて暗い。
真つ暗な空間。

何の音もしない。
俺だけしかいない空間。
どこか懐かしいような悲しいような。
そんな空間。

「幸路さん……」

キングスライムが幸路さんを襲つてから三日が過ぎました。
けれど幸路さんは日を覚めません。
お医者さんが言つには、こつ日を覚ましてもおかしくない、だそ
うです。

全では私達が……。

どこが最強ですか！

一人の大切な人さへ守れてないですか！

私は幸路さんの布団をギュッつと握り締めます。

「幸路さん……帰つてきてください……」

居心地はいいわけではない。
逆に居心地は悪い。

だけど俺はここにいてしまう。

だって俺には他に居場所がないから。
違う場所に行ってしまったら俺は絶望してしまう。

あの日みたいに……。

中学三年生のあの時みたいな絶望が俺を苦しめるだろ？
だから絶望しないためにここにいる。
傷つかないで生きるために。

私は幸路さんの手を握る。

その手は温かく冷たい。

温かいはずなのに冷たくも感じる。

そんな幸路さんの手を私は思いつきり握る。

幸路さんに冷たさを感じさせないために。

私が幸路さんを暖める。

冷たい氷を溶かすように。

真つ暗なこの空間が消えた。

続いて真つ白な空間に変わり俺の前には大きな鏡が現れた。

『 なあ、俺。お前はまだそんな理想を捨ててなかつたのか？ 理想
なんて全て幻想だ。絶望する前に捨てちやえよ
理想は全て幻想？

『 お前だつて分かつてるんだろ？ こんな毎日は続かない。今まで
もそつだつただろ。希望は絶望へと変わるんだ。その希望が大きい
分、絶望も大きくなる。お前には絶望してほしくないんだよ』

希望が絶望へと変わる。

『なあ、昔みたいに仮面をつけるよ。』

仮面……？

ああ、嘘の仮面か。

『嘘をついて自分を守れ、嘘をついて友達関係を作れ。そうすればお前は傷つかないで済む』
嘘をついて自分を守る。

握つても握つても幸路さんの手は冷たい。

彼の手が体が心が。

彼の全てが冷たい。

彼の氷は簡単には溶けない。

手を伸ばせばそこそこいる。

だけど心に触れようとするとその氷が邪魔をする。

「幸路さん、私達はそんなに頼りないですか……？」

そう呴いた言葉は誰にも聞かれず消える。

『なあ、おい。そこの俺。仮面をつけるよ。』
差し出される仮面。

戸惑う俺。

俺は今、この仮面に縛るしか出来ないのか?
自分が傷つかないための仮面。
俺は今、手を伸ばした。

「ねえ、セーちゃん。もう休んだほうがいいよ

「次は私達が見ますので」

「私も見ます……」

私は幸路さんが起きるまでここにいます。
たとえ何年でも。

私を必要としてくれた人ですか。

「それにも何で起きないんだうつへ…

「何ででしょうね……」

魔法の回復を使っても起きませんし。

何をしても起きません。

呼吸はしているので死んではないです。

「起きたくないのかもね」

「えつ？」

「あ、いや、たぶんそうかもなって。体に問題はないなら、問題
なのは精神でしょ？だから精神がまだ起きたくないって思つてる
んじやないかな？」

「起きたくない……。

つまり私達に会いたくない。

戦いたくない。

傷つきたくない。

幸路さん、何で起きてくれないんですか？

藁に縋るように俺は仮面に手を伸ばす。

自分が生きるために。

『 そう、それでいい。お前は一生仮面をつけ続けるやつと仮面を手に入れた。』

生きるための術を手に入れた。

傷つかないための仮面を手に入れた。

「俺は一生傷つかないで済むんだあ！！…………何て言ひと思ひ

たのかカス』

『 な、何！？』

「一生傷つかないだあ？ つざけんな！ 俺はここに来て知った！ 仲間を持つて初めて知った！ 幸者のやつらは何で仲間のために傷つこうとするのか！ 前までの俺だつたら知らなかつたぜ。いや、知らうともしなかつた。だけどな！ 俺は分かつた。傷つかずに幸せを勝ち取らうなんて無理だ。傷ついて傷ついて…………傷つきながら強くなるから幸者^{プラス}は強いんだ！」

これが俺の答え。

いつか違う俺に問われた、俺の答え。

『 そうか、まあ頑張れや、過負荷^{プラス}』

「ああ、頑張つてやるさ」

さつき受け取った仮面を自分の顔につける。

「そしてありがとうな」

『 どうも』

俺は鏡を壊した。

俺の新しい力で。

温かい。

さつきまでの冷たさが感じられない。

「起きます……」

「え？」

「んー、おはよー」

「ええ！？」

「？ どうしたのそんなに驚いて

まあ、驚くのは普通だと思います……。

「あ、セイ

「な、何でしょうか?」

幸路さんは私の顔を触つてきます。

それだけで私は恥ずかしいので顔が真っ赤です……。

隈が出来てる……セイ寝なきやダメだぞ。はい！ 早速ベッドへ

「れつじ」と「

「さういふ事は、おまえのやうな人には、

わ、わわわわ、私は今幸路さんにおんぶされてます……。

卷之三

そう思ふと欠伸が出ていつの間にか寝てしましました……。

「ほー、俺はそんなに寝てたのか
セイを部屋まで連れつて行つてベッドに寝かせて、違つ部屋で//
ランとエミと話してゐる。

俺二日も寝てたんだ。

「その間ずっとセイが看病してたんですよ」

「で
き
る

どおりで限が出来てたわけだ。

「ボケにはお礼なし?」

〔 〕

「うん、したさ。おでこのタオルとか変えたり、汗かいてたから拭いたり。大変だつたんだよ。男はボクしかいなかつたんだから」

「はいはい、じゃあHIMIも俺をしようつか
もちろん、ミランもしてたよね~」

「え、ああ、まあ、はい……」

謙虚そうにミランは返事をする。

「そんじゃ、明日は街に行きますか!」

「賛成!」

「私も賛成ですね」

「もう、夜なんだから一人は寝な

「え、あ、はい。では失礼

「じゃあね~」

「ああ、さて俺も自分の部屋に戻るつか

。 。 。

「……………眠れん!」

俺が寝たのはそれから三時間後のことでした。

あつちでなべじけひへ感じじるもの

俺が二日間の闘いから田原めた翌日。

俺達は城を出て街に来ていた。

「へー、街つてこんな感じなんだ」

レストランや服屋。

あつちの世界と同じだな。

違うところは電化製品の店がないこと、武器屋があること。
街に来るのは初めてですか？」

「まあな、外はクエストのときしかでないしな」
だからいつか行つてみたって思つてた。

「じゃあ、何が欲しい？ おじちゃんが買つてあげるよ」
ちょっと冗談を交えて聞く。

「ボクは小刀！」

「で、では私は……新しい杖を……」

「それでは私も新しい双剣で」

聞いたことがあるけど……それつてかなり高いよね？

「わあー、ここが武器屋か」

「ええ、ここに一一番性能がいいやつが揃つてます」
「つていうかボクが欲しいのはここしかないよ」

「わ、私もです……」

まあ、金があつたもこの世界にはゲームがないから金はなつくて
いいし。

それに食事は王様のほうで払つてくれるし。

「じゃあ、みんな選んでて」

「「「はーい」」

ついでだし俺も買おうかな。

俺がいいと思ったのは「魔炎剣」。

杖みたいに魔法の攻撃力を上げる剣。

とくに火系の魔法をね。

それと「波動銃」。

魔力の波動を打ち出す銃。

普通の魔力の弾を打ち出すことも可能。

縦に真っ直ぐに撃てるし横に広がった弾を撃てる（ただし飛距離は長くない）。

俺はこの一つを買おうか。

「あ、あのう」

「ん、決ましたのか？ セイ」

「はい、これです……大魔石杖」

「ほー、大魔石を使つた杖ね。

今の杖より性能がかなり上だから、セイはまた強くなるのか……。

「だ、ダメでしょうか……？」

「いや、いいよ。セイは隈はできるまで俺の看病をしてくれたんだ。そのお礼なんだからこれぐらいお安いもんだよ」

「幸路様」

「ミランも決ましたの？」

「ええ、この炎氷式の双剣を」

ミランが選んだのは炎の剣と氷の剣。

まあ、魔力を剣に注ぎ込めば炎と氷が使えるつてやつだ。

しかもその剣は性能がいいので炎も氷もかなり強いみたい。

「それにも結構時間が経つたのに、エミリアはまだですか？」

「わ、私は一番最初に選んでくると思ったんですが……」

「まあ、いいじゃん。まだ時間はあるんだし。まだ見ててもいいんだよ？」

「わ、私はいっぱい見ましたから」

「私もです」

「そう」

まあ、俺も結構見たんだけどね。
しばらくHIMIを待つた。

「お、遅いですね……」

「たしかにそうですね……」

「探すか」

「HIMIリアさんのことだから……小刀のところでしょうか?」

「ああ、たぶんな」

つてことで俺達は小刀が売つているところに行つた。

「HIMI……つていた」

「何をしているんですか?」

「え、あー、それにしようかなと。眺めてた
トランペットを眺める子供ですか君は。」

「それで買いたいやつはあつたのか?」

「うん、まあね」

HIMIが指を指したのは神式雷刀。

もちろん小刀。

「それでいいのか?」

「うん」

「では何で遅かったんですか?」

「遅い? あ、ごめん。決まってたけどずっと眺めてたら時間忘れてた」

えへへ、と舌を出しながら囁つHIMI。

お前は男なのか? と聞いて質したい。

「それじゃ、買うぞ」

「おねが~い」

「お願ひします」

「お、おねがいです」

「全部で八千五百万円です

やつぱり高いよね……。

「はい」

「ありがとうございます。あとプレゼントです」

「指輪？」

「これは召喚石で作った指輪です。武器を指輪に登録する」とで、武器を持つといかなくともその指輪で武器を召喚することが可能になる優れものです」

「ほー、便利だ。」

「ほい」

「わー、指輪だー」

「これはありがたいですね」

「便利です……」

「登録の仕方は指輪に魔力を注ぎ登録の魔力を得られますので、続いて登録の魔力を武器に注げば終わりです。そこで武器が消えます。が指輪にしまつてあるので、心配しなくてもいいです。指輪に召喚と唱えれば武器を召喚できます。慣れれば唱えなくても召喚できます」

「説明ありがとうございます。」

「じゃあ、お昼だしレストランでも行くか？」

「そうですね」

「私もお腹空きました」

「ボクはオムライス」

近くにレストランに入る。

そしてすぐに店員さんが「何名様ですか?」と、あっちの世界の決まり文句でもてなす。

「四名です」

そして店員さんに窓側の席に誘導された。

「レストランってあっちの世界と一緒になんだな」

「そうなんですか?」

「ふーん」

「ああ、まつたく一緒にだ」

その後、メニューを見て注文した。

もちろんエリは宣言通りおりオムライスを選択した。

「暗くなりましたね

時は五時。

「ああ、そろそろ帰るか

「はい！」

「うん！」

満足そうな笑顔で答えるセイとエリ。

レストランのあと服屋さんとか色々なところに回った。

あっちの世界じゃ友達とかいなかつたから新鮮で楽しかった。

俺はかなり後悔している。

黒神めだかに早く出会つていて早く改心していたら楽しい学園生活を遅れていたのかもな。

後悔しても意味はない。

だから俺はこっちの世界で楽しむことにした。

無力な嘘つきだ

「お前らはついてこなくていい

「で、でも！」

「俺には作戦があるんだ

「そう仰りますが……」

「次は絶対に成功する」

「まあ、幸路が絶対って言つてるんだし、いいんじやない？」

「ああ、俺は絶対に負けない」

俺は今からまたスライム狩りをしに行く。

今度は絶対にキングスライムが出ないとこりへ行くからとセイとミランに説得中……。

「俺が信じられないのか？」

「い、いえ……そういうわけじゃないんですけど……」

「じゃあ、行くぜ」

俺は無理やり会話を終わらせスライムのところに行く。

「ここか……」

キングスライムは特定の場所でしかない。

前回のところは出ないところだった。

「そんじや、スライム狩りを開始させてもうつかな
本音はスライム狩りではない。

「新しい武器の威力試させてもうつかないのー。」

俺は剣を構える。

「はあああー！」

スライムに剣を振り下ろす。

そして他のスライムが俺に向かって突進。

「『火炎屏風』ー！」

炎の壁でスライムの攻撃を防ぐ。

この技はこの魔炎剣があるからこその扱える魔法だ。

「『炎矢』！」

そして残つた奴等を炎を矢で撃つ。

「そろそろか……」

俺の勘では来る。

によろん。

そんな音が聞こえそうなキングスライムが現れた。

「やつぱりな」

そしてキングスライムの突進。

「残念ながら俺の剣では倒せない……だから弱点は克服させてもらつた」

「（力チャツ）」

ズガーン！

波動銃。

「剣で斬つても再生されるなら、波動で中に衝撃を『ひいてやる』」
これが俺の弱点の克服。

そして俺は確かめる。

「『無理無力』！」

この前喰らわなかつた過負荷を発動させる。
（スキル）

キングスライムが上に跳ねる。

「つづーことは利いてないらしいな」

俺は過負荷スキルが利いてないのに笑つてしまつ。

「あつはつはははははははははは！」

今ので少し確信が持てた。

「それに今、お前は空中で動けないな」

銃をキングスライムのいる真上に構える。

「『一射数波動弾』」

一回の発砲で数弾の波動を打ち出す技。

それを乱れ撃ちだ！

「（ズガソッ）！」

数秒その音が俺とキングスライムしかいない空間に響いた。

そして数秒後キングスライムが落ちてきた。

「もう壊れたか。じゃあ本題。見えてるんだろ？」

俺は独り言のように呟く。

いやいや、俺は悲しいやつじゃないからね？

空想の友達なんていらないからな？

俺はいると思われる人物に話しかける。

『あらら？ バレっていましたか。流石勇者様と言うべきですね』

「まあな、たかがキングスライム」ときが俺の過負荷スキルを打ち消せるわけないだろう。だつたら俺の過負荷を打ち消せるのは強いやつ…

：魔王だな

『では、前回倒された魔王は何でその力を打ち消せなかつたんでしょうね？』

「俺もそこは疑問に思つてたけど、答えは簡単だろ。俺の過負荷スキルを予想できなかつた。または弱いだけ」

『流石ですね。どつちも正解ですよ。彼は弱いし、反応できなかつた……。でも今回は彼のようになりませんよ。僕は君を調べましたからね。だから貴方の『無理無力』を打ち消せました』

「ほー、魔王つてのは勇者を調べ上げ倒すのか。力ずくで倒すつて考えてたよ」

『魔王はそこまでバカじゃないですかね』

「んじやさ。魔王さん、俺と戦おうぜ」

『ええ、こつちもそのつもりでしたし。それに僕は『無理無力』は利かないの』

すると地面が割れた。

そしてカプセルのような箱から眼鏡をかけた男が出てきた。

「では、さつそく死んでください。勇者幸路」

「こつちのセリフだ魔王。まあ、まずは『無理無力』《諦めろ》』

俺はさつそく過負荷を使^{スカル}い。

「その程度ですか？ 勇者つて」

まあ、利かないわな。

「では、こつちの番です。『土縛』

土が俺の足を縛つてくる。

ちつ！ 動けない！

「『炎弾』！」

こつちに近づけさせないために炎弾で攻撃する。

「こんな弾、僕には利きませんよ」

「ですよねー」

「では、僕も。『土人形』」

土人形……ゴーレムか？

「土に偽りの魂を入れた、僕の最高傑作にお人形ですよ。さあ、遊んでください」

遊ぶならまず足枷を外せ！

それにしても偽りの魂ね……。

試してやるうか……。

「さあ！ 殺つちゃいなさい！」

数体のゴーレムが俺を襲う。

ゴーレムの拳と俺の顔の距離が10m。

ゴーレムは俺を殴らない。

「な、何で動かないんだ！ 僕の土人形は『無理無力』^{スカル}は利かないぞ！」

「ああ、そうだろうな。だから俺は新しい……いや、最初の才能の強化版『全変転化』を使わせてもらつた」

ちなみに強化前は『嘘つきの仮面』。

俺が最初に手に入れた才能『嘘つきの仮面』を強化した『嘘つき道化師』。

「行け！ ゴーレム！」

俺はゴーレムに指示を送る。

「な、何で！ そんなのデータになかった！」

「そのデータは古すぎだ。俺に勝ちたかつたら俺以上に過負荷にな
れよ」

「ゴーレムの相手をして動けない魔王に近づく。

「最期に教えてやるよ。俺の『嘘つき道化師』は俺のための過負荷うそつき
だ

俺は拳を握る。

「俺の肉体に嘘をつき、攻撃力を上げる……」

「！」

魔王は声にならない声で叫んでる。

「今の俺の力は通常の倍の力だろうな
そしてもう一度力強く拳を握る。

「死ね

強く握り締めた拳で魔王を地面に殴りつけた。

地面は俺を中心にして凹んでる。

「俺は無力な嘘つきだ……」

出会いは偶然か運命か

動けない……。

一步も歩けない。

寝返りをうつことも無理だ。
なぜなら……。

寝返りをうつることも無理だ。

「俺は無力な嘘つきだ……」「

魔王を倒した俺は独り呟く。

「さて、ミランとセイが心配する前に帰るか
俺は地面に殴りつけていた拳を上げる。

「うつ！」

痛い……。

骨折ではない……。

でも体が動かない……。

「もしかして……『嘘つき道化師』を使ったから……」「

慣れない過^{スキル}負荷を使つたから体が耐え切れないのか……。

全身筋肉痛……。

ミランとの練習の後の筋肉痛より痛い。

あれから五時間。

俺はまだ動けないでいる。

あたりは暗くなりつつある。

たぶん城では。

『ま、また幸路さん……』

『急いで探しに行きますよ！』

『流石にこの暗さは危ないからね……』

つてな感じになつてゐるだらう。

「あ～、誰か助けて～」

俺は何となく咳いてみた。

「……呼んだ？」

「うわっ！」

いつもだつたら体を飛び上がらせ驚くのだが、体が重いことを聞いてくれない。

「……酷い人」

「すまん、すまん……いきなり出でてきて、ビックリしてさ」

絶対みんなビックリすると想つ。

俺の前に立つてゐる少女の身長はセイと同じ位の小柄や。それでいてセイとはまったく違つたく違つた雰囲気を漂わせてゐる。

「……お兄さんはそこで何をしてるの？」

「ん、俺か？ 俺は筋肉痛だ」

女の子は「……ハア？」といつのような感じの顔をしてゐる。「使い慣れない技を使って全身筋肉痛ー。そんでここから動けないから寝てるつてこと」

「……そういうこと。名前が筋肉痛かと思つた……」

「ないない。子供に筋肉痛つて名づける親の顔を見てみたいぜ」

「……それで私に何の用？」

「いやー、適当に咳いてみただけ」

「……そつ……では」

少女はそう言って歩き出した。

「ちょっと待つてくれ

「まだ何か用なの？」

「助けてくれ……」

這い蹲るように頼んでみる。

「……いやだ」

「……助けて」

「……無理」

助けてお願いします」

「歴史」も「歴史」

「何でも詰め」とを聞きますから

俺はどうにでもなれ！ と思いつながら危ない一言を言つた。良い子のみんなは知らない人にそんな事言つちゃダメだぞ

「……いやあ。『回復』

一気に筋肉痛から回復する。

ああー、気持ちいい……。

列念ながら俺の回復ではこの筋肉痛を治すことが出来なか

卷之三

お前で回復魔

二二二

心 人 て 一 扇 お 花 た 仰 は 何 有

卷之三

[.....]

卷之三

（ククツ）

「三一堂」文庫
支那の歴史と文化

「一、窓の外の只、二、

「どうぞお召し下さい。お食事はおまかせで、お酒はお手頃なものが貰えます。」

卷之三

「……………」

「ん、セイ。何か言つたか?」「い、いいえ。何も……」

「でも何か言つていたような……。」

「幸路様!」

「は、はい!」

なぜか俺は強めに返事をしてしまった。

「何がどうなつて、どうなつたのでしょうか? 色々説明してください。私たちだつて凄く心配したんですから!」

「そうだよ幸路! みーちゃんなんて『幸路様が……幸路様が……』つてずっと呟いたり。『幸路様がいなくなつたら私は……』つてずっと五月蠅かつたんだからね」

「あー、はいはい。まあ、簡単に説明すると……」

俺がキングスライムと戦い、魔王と戦い。

それで筋肉痛で五時間動けなくて。

この女の子に助けてもらつたことを説明した。

「そうですか……また魔王をお独りで倒したんですね……」

「だつてあれは俺の推測だつたし。まさか本当に魔王が出るなんて思つてなかつたから」

「分かりました……で、名前は何て言つんですか?」

「あ、名前。俺も聞いてなかつた」

「そういえば筋肉痛の辛さで忘れてた。」

「……私は柊舞華ひいらぎまいか」

「つ……?」

「どうしたんですか幸路様!?」

日本人!?

違う世界……俺と同じ世界の住人。

「おい! 柊!」

「(ビクッ!) 何?」

「お前はこの世界の住人か!」

「……」

「お待ちください！ 幸路様！ 戸惑つていらつしゃまやー。」
俺はそこで気づいた。

「「」めん」「

「……いや

「ハア……俺、最悪だ……。

ちょっとと興奮してしまった……。

「まあ、もう一回質問する。お前はこの世界の世界の住人か？」

「…………違つ」

「！……じゃあ、お前は日本人か？」

「！……貴方も…………？」

俺だけではなかつた。

「」の世界に来た人間。

「……そういうえば、貴方の名前は？」

あ、そういうえば自己紹介忘れてた。

「俺の名前は桜島幸路。箱庭学園の生徒だった。今は「」の城の主で「」の世界の勇者らしい」

まあ、俺が箱庭学園の生徒に戻れるか不明だがな。

「…………つ！？」

「？」

ん？ 何でビックリしてるんだ？

「……箱庭学園元十三組現・十三組…………桜島幸路先輩ですか…………？」

「！ 何で知ってるの？」

でも答えは何となく分かるけど……。

「……私は箱庭学園十三組でした…………」

同じ箱庭学園十二組。

異世界に連れてこられた俺達。
何がどうなつてるんだ……。

まあ、俺と柊は同じ境遇か……

「…………はい」

「んじや、柊、お前はここにいる。同じ境遇なら一緒にとこいつこ

たほつがいいだろ? 「

「……いいの?」

「ああ、それにお前行くところないんだ?」

「…………（「クツ）」

柊はすばしだったのか顔を赤く染めてる。

「「「? ? ?」」

そんな俺等を見て頭にハテナマークを浮かべてる人が三人。
「簡単に説明すると、こいつは俺と同じ境遇でこの世界に来てしまつた異世界人。まあ、俺と同じ世界の住人だな。そしてこの城に住むことになった」

「「「は、はあ……」」

「いまいち納得してない顔だな……。

「…………よろしくおねがいします」

「まあ、詳しいことは分からぬいけど、よろしく～

「よ、よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします……」

まあ、そのうち打ち解けるかな?

「……先輩」

「ん? 先輩つてのは俺でいいのか?」

「……はい

「で、何だ?」

「……先輩つて何でこんな大きい城の主なんですか?」

「ああ、俺はこの世界では勇者つてことになつてるんだ」

「…………マジですか」

「マジですよ」

「あ、そういうえば何で柊は『回復』を使えたんだ?」

「……見よつ見真似ですよ」
凄くキリッとした顔で言われたぜ……。

正義が勝つのは少年誌だけです

俺と同じ境遇の少女、柊舞華。
何で俺達がこの世界へ来たのか、どうやって来たのか。
全て不明。

これは夢なのだろうか？

ミランもセイもエミも。

全て何もかも俺が創りだした幻想なのだろうか？
考えても考えても分からない。

分からぬなら考えなければいい。

俺はそう自分に言い聞かせ眠る。

ガタガタ……。

眠りから覚めた俺は馬車に乗っていた。

俺の記憶が正しければ約束も何もしていなかつたはずだ。

俺は窓から景色を眺める。

辺りは広原。

奥には綺麗な海。

俺達はそれを背景に馬車に乗っている。

「なあ、何で俺はここにいるんだ？」

「幸路様も知りませんか……」

起きているのは俺とミランだけ。

他のエミ・セイ・柊は寝ている。

「その返事だとミランも知らないようだな」

「ええ、起きたら馬車に乗つていました……

たぶんけど王様の仕業か？」

でもなぜ？

魔王の刺客だつたれ俺達は死んでるはず……。

「まあ……考へてもしかたないか……」

俺はまた考へることを止め寝た。

「……て……さい」

「ん……声が聞こえる……。」

「おきて……わい」

「これはミランの声か？」

「起きてください！」

「（びくつ！）」

俺はビックリして起き上がった。

「どうしたんだ！ ミラン！」

何だか状況が分からぬからミランに尋ねる。

「い、いえ。馬車が止まりましたので。起こしました

馬車……？」

あ、そういうえば俺達馬車に乗つてたんだっけ？

「んで、みんなは？」

「まだ起きません……」

「じゃあ、馬車を運転してた人は？」

「最初から見当たりませんでした……」

「運転手がいない？」

「じゃあ、馬が勝手に動いた？」

「そして俺達をここに連れてきたということか？」

「意味が分からん……」

「そして俺達が着いたところは大きなお城。

俺達が住んでる城より大きい城だ。

「もしかして魔王の城じゃないよな？」

「否定は出来ません……」

「ですよね……」

「どうしたものか。

「とりあえず、みんなを起^{ハシ}さう」

「フフー」とだ、理解したか?」

「は、はい……」

「まあ、分かつた……かな?」

「……理解した」

まあ、大体は分かつてくれただろ?。
そう言つ俺だつて大体しか分かつてない。

「まあ、とりあえず。城に乗り込む?」

エミが簡単に言つてきた。

「でも残念ながら武器は持つてないだろ?。指輪だつて」

「え? あ、ホントだ……」

残念ながら俺達は服は着て^{ハシ}いるのに武器は持つていないと^{ハシ}いう状況だ。

「ミランは素手で戦えるか?」

「ええ、まあ、はい」

「エミは素手で大丈夫か?」

「ん、ボクは……ビミョーかな?」

「セイは魔法で戦うとして。終は戦えるか?」

残念ながら俺は終は戦つて^{ハシ}る姿を見たことが無いので何とも言えない。

「……私は回復専門だから。他は無理……」

「了解」

前にミランとエミ。

真ん中に俺と終。

後ろにセイ。

という形で城に入ることにした。

「では行きます」

ミランが合図し、扉を開ける。

「城の主はいるか！」

最初に入つたミランが主を探す。

そして俺達とは違つた雰囲気が城にあつた。

「お待ちしておりました」

メイド？

俺の目が正しければ今でた人はメイドだ。

「お前は誰だ？」

ミランは警戒しながら問う。

「私はこのお城のメイドです。貴方がたのことは主から聞いています」

む、主？

その主が俺達を招いたのか？

ふうつ……なら話が早い。

その主をボコればいいんだろう？

俺達を勝手に馬車に乗せ連れてきた。

ム力つく……。

絶対に半殺し……いや、殺してやる。

「こちらです」

大きな扉の前に連れてこられた俺達。

「この部屋で主がお待ちになつておられます」

そうか……この部屋に俺にぶん殴られるやつがいるのか……。

「……コロス」

「幸路様！？」

「何だ？ ミラン」

俺は少々機嫌が悪いんだ。

「いえ……何も」

何かを察したのかミランは黙った。

「一応言つておぐが……俺はこの主つてやつを殴るつもりだ。いや、ボツコボツにするつもりだ」

俺はメイド以外のみんなにしか聞こえないようにボソソッと呟く。

「が、頑張つてくださいね……」

セイは苦笑しながら答えた。

「……一応戦闘の準備はしとけ」

さーて、どんなバカ面のやつが俺を連れてきたんだ？
不細工だつたら殺す。

イケメンだつたら殺す。

微妙でも殺す！

「邪魔するぞ、バカ野郎！」

扉に俺の渾身の蹴りをいた。

「…………」

口をポカーンと開けている人が一人。

セイだ。

「（ちょ、こんなことしていいんですか！？）」

セイが俺にしか聞こえないように話しかけてくる。

「（俺達を勝手に馬車に連れ込んだんだ。これぐれい許されるだろう？ 許されないのなら、目の前にいる主を倒し、この城の金を全部貰い、最後にこの城を破壊する）」

もう立ち上がりやうにな。

「んで、お待たせしたなバカ野郎」

俺は威嚇するように前にいる主とやらに話しかける。

「つたく、遅い！ 下級生物が俺様をバカ野郎と？」
〔冗談をよせ偽者〕

「はあ？ 偽者？ 何のこと？」

「そつだつたな、お前みたいなやつはバカ野郎ではなかつたな。訂正させてくれ下種野郎」

「な、俺様を侮辱するか！」

「五月蠅い、黙れ、そして消えろ。お前を見るとイライラする。つてか同じ世界にいるのが嫌だ。いつやこの世界から消えれば？」

俺は罵声を浴びさせる。

何か俺、こういうタイプ大嫌いだ。

「くつ、俺様が穩便に事を進めようとしてるのに……殺されたいのか？」

「逆に言おう、殺されたいのか？ 俺はこの城に入つてから色々な場所にトラップを仕掛けた。この城を壊そうとすれば簡単に壊せるぞ」

もちろん嘘だけど。

「う、嘘だ。メイドはずつとお前たちを監視してた。メイドの話だと不審な動きをしてなかつた！」

「バカか？ メイドの前で不審な動きをするわけないだろ？ 仕掛けるなら気づかれないようにするのが当たり前だ」

だからトラップなんて嘘だつてば。

「く、クソ……」

「さあ、速く何で俺達を連れてきたか言え。そもそもばこの城を壊す」

「…………」

「何をしてる？」

主（次からバカ）が俯いてる。

「…………くく」

「？」

「あつはははははははは！」

「何が可笑しい？ 狂つたか？」

「これほど可笑しいものはないだろ？ 俺様がお前みたいな下級生物によって死ぬわけないだろ？ だつて俺様は勇者なんだからな」

あー、はいはい、理解したよ。

そういうことね。

俺のことを偽者と言つた事が理解できたよ。

「ほー、では今ここで殺すと?」

「ああ、本当は勇者を名乗るな。と言つて追い返すつもりだったが

……俺様はイライラする」

「ふーん、俺は殺されるのか……」

やべえ笑いを堪えるだけで必死だ。

お前が勇者? 僕は偽者?

結果を残さない勇者なんて必要じゃないんだよ。

「どうやって俺は殺されるのかな? 勇者くん(笑)」

「(笑)をつけるな!」

いやいや、だつて笑いが止まらないんだもん。

「ほり、この扉の後ろには俺の仲間^{パーティ}がいるんだぜ? 偽者が本物に

勝てるわけないだろ!」

やれやれ……。

俺は面倒くさいのに絡まれたな。

「お前は特別に俺様の勇者の剣で殺してやるよ

「幸路様!」

「ミラン? 僕を心配してくれるの?

心配してくれるのも嬉しいけど、この場面だつたら楽しまなきゃ

ダメだぞ……俺とミミみたい!」。

「『加速』」

ミミは加速でいっきにバカに近づく。

そして足を蹴り、バカのよろめく。

「さて、これで俺達が有利になつたけど……殺していいよね?」

「ご主人様!」

お、ここでバカのパーティー登場ね。

数は四人。

俺達は俺を除き四人。

その内、終は戦えない。

まあ、あいつ等なら勝てるっしょ。

「ご主人様の仇……とらせてもらいます！」

「俺様生きてるよー？」

もうお前死んだってことでいいよ。

「さて、殺りあおうじゃないか勇者」

「殺されるのはお前らだけで十分だ」

バカが勇者の剣で俺に襲い掛かってくる。

「俺は得物を持つてないぞー」

「ふんっ、そんなの知るか！」

バカは剣を真下に振り下ろす。

「お前は卑怯者か？」

「卑怯者だあ？ 俺様は勝てれば何でもいいー」

「俺はその考えだけは嫌いじゃねえぜー！」

俺はバカの剣をかわしながら会話をする。

「だから、俺は正々堂々と卑怯な技でお前を倒してやるよ」

「俺様を倒す？ 寝言は寝てから言えー まあ、お前は一生田を覚まさないがな！」

「そー、じゃあ『無理無力』^{あきひめい}」

俺はバカの武器に過負荷^{スキル}を使つた。

武器は戦うために作られた。

だつたら武器が諦めたら？

「そんな物で俺を殺そなうなんて冗談も程々にな

「なつー！」

俺は自分の拳で勇者の剣を壊す。

「勇者を名乗るバカに俺が負けるわけないだろ？ この世界はヒーローショーじゃないんだ。お前が本物の勇者で俺は偽者だったとしても。正義が本物が勝つとは限らないんだよ」

俺は右拳に力を込める。

「『嘘つき道化師』」

バカは壁を突つ切つて飛んでった。

「武器を持たない貴方がたが本物も勇者のパーティーに勝てると思つてるんですか！」

ミランは相手の剣を避ける。

「私は勇者の仲間ではありません。桜島幸路様の仲間です。そちらの勇者と一緒にしないでください。『幻影夜桜』」

「なつ！」

幻影夜桜。

自分の武器を桜の花弁と化せ、その花弁を自由自在に操れる技。

「な、何だその桜は！」

残念ながらミランは武器を持ってきてはいる。だから幸路とバカとの戦いで散らばつてゐるガラスを桜と化せ。それを武器とした。

「…………では、幸路様のために倒させてもらいます」

「んで、君が俺の相手かな？ 結構顔がタイプだけビ。諦めてくれない？」

「残念だから、ボクは君はタイプじゃないや。ボクと肩を並べたいなら幸路みたいになるんだね」

「それじゃ俺には無理だ。つてことで力ずくで物にする」相手が剣を構える。

「『炎弾』！」

相手の炎弾が飛んでくる。

エミがそれをギリギリで避けた。

「隙アリ！」

相手がエミの隙を狙い剣を振る。『

「誰が隙があるのかな？』『加速』『一』

加速で相手から距離を置く。

「『雷纏』『一』

エミはセイに落ちてこむの『雷を纏わせ相手に投げた。』

「ぐつ！』

あまりの速さにつけず相手が傷を負つ。

その隙を逃がさないようにエミが畳み掛けるように攻撃をする。加速プラス雷の攻撃でエミは相手に余裕を持たせない。休むことのない攻撃の連鎖。

「ああ、休めるよ思わないでね』

「あんた等何も持つてないじゃん。それであたし達に勝つとしてんの？ そもそも偽者とか、よく勇者を名乗ろうとしたね？ もしかしてお前等バカ？』

「まあ、お前は黙つてて。僕が殺るから』

「ハア！？ テメエふざけた事言つてんじゃねえぞ！ クソガキ！』

「そう熱くなるな。うざつたい』

「なつ！？ この……クソガキ！』

セイと柊の前で口論する相手。

セイはポカーンと口を開けてる。

柊は「……五月蠅い」と呴いてる。

「ふんつ、まあいいわ。とりあえず速く殺そつか

「だな。お前と口論するだけ時間の無駄だ

「お前は後でゆっくり殺してやるよ』

「殺せるならな』

「そつか……じゃあ！』

相手の女がちょっとした加速呪文でセイに近づく。

「その首貰つた」

「女の大鎌がセイの首を狙う。

「……私を忘れるな」

「ありや？」

たしかに鎌はセイの首を刈っていたはず。

「……セイ大丈夫？」

「え？ ええ、大丈夫です……。それで何をしたんですか？」

「……ただのガード魔法」

柊が練習した魔法は補強魔法などの援助魔法だ。
因みに今使つたのは『ガード』。

壁みたいなやつで物理・魔法を防げる魔法。

「……私はセイを守る。だからセイは戦つて」

「は、はいっ！」

「さつきの言葉を借りるけど。僕を忘れるな」

敵の男が『』を構えてる。

「では、バイバーイ」

炎の矢が力強く飛ぶ。

「つておい！ あたしにも当たるだろ？ が！」

「チッ！」

「狙つたな！？ お前あたしを狙つたな！？」

「……大丈夫？」

「ええ、柊さんの防御で助かりました。ありがとうございます」

「……いえいえ」

チームワークがなつていらない一人、チームワークがなつている一人。

対照的なチームの戦い。

「……じゃあ、そろそろお願ひ」

「は、はいです。『氷華』」

「し、しまつた！」

「……先輩への侮辱は許さない」

「同感です！」

……じゃあ、殺さうつか

「んで、勇者の仲間を倒したのか？」

はい

「俺達の隣では勇者の仲間がのびてる。ちなみに勇者は俺がぶつとばした。」
「そーか、んじゃ。この城を燃やそう」「もう立ち上がりないうちにですか?」

立もつ、ああ、ああ、

「たゞ、
たゞ、」

火炎系の魔法でいいだろう。

それじゃがうそ

井上謙次著

「どうやつて帰る?...」

「ミラン。この場所分かる？」

— いえ……」

迷子かな？

しかもおかれはノはいなし

まあ とにかく人を探そう

前回きな案を出したエミに賛成

三時間後街に出れて帰り道が分かりました。

砂漠から決められた一粒を探すなんて無理でしょう

「ハア！？ 人探し！？」

「そうじや」

王様の城へ連れてこられた俺に頼まれたのは人探しだった。

「何で俺が！」

「その人はワシの友達の娘さんなんじや。それでじや、その娘はこの城に遊びに来ようとしたのじやが、来る前に行方不明になつたのじや」

「あー、それじやあ今頃は死んでるかもね、合掌……」

「縁起の悪いことを言つでない！」

「すまんすまん。でも王様の友達つーー」とはどつかの國の王様？

「まあ、そんなところじや」

「それじやあ、そのお嬢様には護衛がついてたはずだよな？」

「ああ、護衛はついてたはずじや」

「合掌……」

「やめい！」

そろそろ飽きてきたので本気で答えることにじよつ。

「んで、街にいるのが、外にいるのか分からん娘を俺達に探せと」「そうじや、やつとは数十年の仲なのでのう、だから頼む……」

「そんなに頭をさげられたらな……断れないだろう。

「ああ、分かつた。それでそのお嬢さんには特徴はあるのか？」

「特徴かのう……たぶん胸のところに龍の紋章が入つてるバッジがあるはずじや」

「おこおこ……そんな小さい物かよ……。

「ま、まあ、頑張つてみるわ」

「と言つたものの……どうすればいいんだ！」

「ど、どうしたんですかーー？」

「それがな……」

セイに王様に言われたことを言つてみた。

「そ、それは大変ですね……」

「何か人探しっぽいのに役に立つ魔法つてないか？」

「え、まあ、あると思います……」

「流石！ 最強！」

「さ、最強じゃないです！ それに私だつて苦手な魔法ありますよ
「そなのか？」

「え、ええ、回復魔法とか補強魔法は苦手ですね。一応使える」と
には使えますが……」

「ほー、まあ、使えることに使えるんだろ？ いいじゃん。それ
でその魔法つて何だ？」

それでも“最強”的称号を持つだけある。

んで、お嬢様を見つける魔法は何かな～？

「『検索』なんてどうですか？」

「おお！ それで探せるなー！」

万事解決！

何でも『検索』は相手の位置や弱点を探ることができるらしい。

「それで龍の紋章が入った女性ですね……」

「ああ……」

『検索』を使ったセイは無言になつた。

それにも護衛があつたのに……。

とんでもなく強いモンスターに襲われた……。

それか……。

「いました！」

「どーだー！」

「い、今、魔方陣に映しますね」

足元に魔方陣が現れた。

そこにはこの街の地図が描かれてた。

ん……街？

「こ、ここは……街ですよね？」

「ああ、モンスターに襲われたってことはないな」

それじゃ……もしかしてだが……。

「とりあえずここに行つてみるか」

「は、はい！」

城を出て十分ぐらい歩き目的地に着いた。

「結構近いな……」

「え、ええ……」

そこは街の裏路地。

人はまったく近寄らない場所だ。

「怪しい……よな？」

「あ、怪しいです……ね」

たぶんこの扉を開け入つていけば見つけられるんだろうけど……。

「俺こいつ場所苦手だわ……」

近づいたこともないし……。

「じゃ、じゃあ入るぞ……」

「は、はい……」

セイは怖いのか俺の腕につかまる。

扉を開けた先の空間はさつきまでと違つ雰囲気を放つてゐる。

「……セイ、どこにいるか分かるか」

「……ちょっと待つてくださいね」

周りは暗い。

隣にいるセイも見ることができない。

「……ちょっと前へ進み、次の道を右です」

「……ああ」

身長に前へ進む。

すると次は明るいところへ出た。

「……そういうことね」

「??」

俺の勘は当たつてたわけだ。

俺の目に映つたのは無数の男たち。
手には酒。

テーブルにも酒。

鎧には龍の紋章が入つてる。

しかもその龍にはバツが書かれてる。

「国の反乱軍つてことか。お嬢様を誘拐したのも理解だ」

「は、反乱ですか？！」

「おい、そこのお兄ちゃんとお嬢ちゃん、お前等はこっち側の人間
か？」

「んー、俺か？ 俺は

「

セイにアイコンタクトを送り、話を続ける。

「過負荷あつちうだ」

剣に槍にメイス。

それぞれが自分の武器を構える。

「死ねえ！」

剣をおもいっきり振り下ろす。

「それが護衛の剣術か？ 笑わせてくれるな……よー」

俺も自分の剣をとる。

そして相手の剣を弾き飛ばす。

「さあ、楽しい宴を始めようじゃないか」

「い、いや……始めていいですよ」

「護衛の力を見くびるな！」

「いやいや、護衛つて護衛してないじゃん」

俺はそれを鼻で笑い、相手の剣を避ける。

そしてよろけた相手の腹を蹴る。

「勇者を倒して名を上げたいバカはいないのか？」

「ゆ、勇者だと…？」

「アイツがか？」

「で、でもああいう少年だと俺は聞いてるぞ」

「んなことどうでもいいんだよ！ 俺がアイツを殺す！」

「はいはい、頑張って殺してね。

「まあ、その前に直進以外のことを覚えような

俺は簡単にその一撃を避け背後に回り背中を斬った。

「勇者様がお前等に処刑をくだしてやるよ」

「うらああああ！」

両手斧とでも言つのだろうか。

一人の男が大きな斧で俺を襲つ。

「コイツだけだと思うなよ！」

続いて俺も俺もというふうに攻撃をしてくる。

やべえ……流石に独りで大人数はきついか……。

「『氷華』」

氷の花が一人の男を凍らす。

そして感染するようにみんなも凍る。

「助かつたぜ……ありがと」

「い、いえ……」

「さあ、セイ。お嬢様はどうらかな？」

「それでお嬢様を人質に戦争をすれば……」

「俺等でも勝てるかもしれんな……」

「反乱軍も大勢になつてたし、あの国をぶつ壊してやる」

「それじゃあ明日にでも……」

「（ノンノンジ）」

「ん？ 何だ？」

「失礼しまーす」

「……し、します」

「何だ貴様等。敵か？ それとも同士か？」

「えーと、敵でも同士でもないです。ただお嬢様を救出しに来ただけですから」

「敵か！」

「いえ、反乱とか俺興味ないですから。貴方達を殺すつもりはないです」

「でもやつさいたやつらは殺しちゃつたけどね。」

「で、お嬢様はどこですか？」

「知りたかったら俺等を倒してからにするんだな！」

部屋の中にいたお偉いさんたちが一斉に杖を手に取る。

「セイ、お前に任せるぜ！」

「は、はいっ！」

飛んでくる魔法。

セイはそれを自分の魔法で相殺した。

「相手は一人じゃないんだよ！」

波動銃の波動で相手を壁に押し付ける。

「さあ、吐け。お嬢様はどこだ？ 頭の風通しがよくなるぜ？」

「あ、あっちの部屋だ……」

男は指をビクつかせ隣の部屋を指す。

「あんがとよ。じゃあ、セイ頼む」

「わ、分かりました」

セイには予め『いこつ等は眠らせとけ』と書いておいた。

「んで、」の腕と足に拘束具がついてるのがお嬢様かな？」「ちなみに目隠しもされています。

「そ、そうだと思いますよ？」

「そつか、セイって『解除』の魔法も出来るよね？」

「ま、まあ、人並みには……」

そう言つてセイは簡単に拘束具を取つてしまつた。絶対コイツは人並み以上だ。

「さあ、お嬢様起きられるか？」

目を見開き俺達を見ているお嬢様。

「ん？ 何か俺達変か？」

「私を殺すのですね……」

「？ 勘違いしてる？ 俺はアクアの王様の頼みで来たんだよ『友達の娘を探してくれ』ってな」

「おじ様の？」

「ああ、そんで俺はこの世界の勇者をやらせてもらつてます」「わ、私はそのパーティです……」

簡単に自己紹介をしたら、お嬢様の目の色が変わつた。

絶望してた目から尊敬する相手を見るようなそんな目に変わつてた。

「貴方が勇者様ですか！ お会いできて光榮です。私はレイシアっていいます」

「あー、かしこまらなくていいよ。それに俺は勇者つていう感じじゃないし」

「国民のため！ とか。

勇者として！ とか。

そんな理由で魔王と戦つてないし。

「でも魔王を一体も倒したのでしょうかー、凄いですよー。興奮を抑えようとするが抑えられないお嬢様。

そんなに勇者って凄いのか？

「ま、まあ、落ち着け。俺のことはいいから、ちよつと質問していいか？」

「え？ あ、はい」

「レイシア、お前の国で何が起こってる？」

反乱軍……。

つづーことは政治が上手くいっていないうとこうかな？
それで国民に不満が積もり。

反乱を企てる兵も現れる。

「いえ……何も起きていません」

「起きていない？」

コイツは嘘をついてるのか？

でも嘘をついてるような表情じやない。

俺は嘘をつくのだけじゃなくて、嘘を見破るのも得意だ。
だから俺から見てレイシアは嘘をついてない。

「どういふことなんだ、レイシア」

「兵士内での噂です……」

噂……？

「『反乱に貢献した者は褒美をやる』。そんな手紙が来たらしいん
です。その次の日、国の偉い人が一人殺されました……。その殺し
た人は褒美として沢山のお金と数々の武器と防具を貰つた……これ
を知った兵士はどうするでしょうね？」

まあ、結果としてでてるんだけど。

「今回、私がこちらへ来ようとした理由は、勇者様に会いたいのと
逃げるためなのです……」

最後のほうは涙目で語ついていたレイシア。

「お父様が……逃げろって……」

自分の命より娘の命を助ける。

良い父親だ。

「だからお願ひします！ お父様を助けてください！」

「ゴツンッ！ とおでこを地面につけるレイシア。レイシアは土下座をして頼む。

昔の俺では味わえなかつた感情がこみ上げる。

「……セイ。俺の言いたいこと、分かつてゐるよな？」

「もちろんですよ」

走つて外へ行くセイ。

「さあ、レイシア。顔を上げて」

「で、では！」

「ああ、俺達はレイシアの父親を助けるために反乱軍と戦つてやる
流石に土下座なんかされちゃね……。

それに土下座なんかされなくとも引き受けたの！」

「一人で歩けるか？」

「ええ、私も弱音を吐いてられないんで」

さあ、明日は戦争だ。

狂われ狂つて乱闘

「反乱じゃと…」

「ああ、明日レイシアの国を攻めるらしい」

「なに…？」

「んで、俺等は反乱軍と戦う。おーけー？」

「うむう……でもお主等は対魔王のパーティー……」

「俺に入探しをさせたのは誰だっけ？」

「ぐぬう……分かつた……ではワシからも頼む。我が友を守ってくれ」

「ああ、頼まれなくても守つてみせる」

俺は頭を下げた王様を背後に歩き始める。

「さあ！ 反乱だ！ 戦争だ！ 亂闘だ！」

「ドンドン！ パフパフ！」

「相手は反乱軍！ 容赦はするな！ 冷徹の心を持って！」

「了解であります！」

「「（何なんだこの一人……）」」

「ん？ 女性陣から心の声が聞こえた気がしたが……まあ、追求しない。

「まあ、冗談は置いておいてだな。今回のメインはレイシアの父親を守ることだ。忘れるなよ？」

「もちろん」

「了解です」

「わ、分かりましたです」

「了解」

「大雑把な作戦だが……俺・ミラン・セイで前線で反乱軍と戦う。エミと柊とレイ（レイシア）は後ろで王様を守ってくれ」

ええー！
ボクが守るのー？

ああ、頼む

ん、まあ、いっか。一応戦えるし

私は賛成だけど、レイシックで戦えるの?」

前回は武器を持ってないアント不意打ちで反乱軍は捕まつたけど

俺もさつき知つたけど。

『用田はムラツリ
だつていきなり。』

つて言われた。

—それじゃ、頼むな

『全軍突撃だ！』

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ପରିଷଦ୍ୟ

反乱軍が突撃を開始した

二〇二

「そうするとボクが戦えません」

「○○」は然れど

まあ、今の状況で冗談を言つてくれるのは嬉しい。

そのお陰でセイドンとレイの緊張が解された

الله عز وجل يحيى عز وجله

「幸路様を置いて死ねませんよ」

「し、死にません！」

「……死ぬつもりはまったくです」

「それにレイ」

「え？ レイって私のことですか？」

「ああ、お前は絶対に死ぬな。まあ、みんなもだけど。お前は父親を守るんだろ。だったらお前も死ぬなよ。お前が死んだらお前の父親を守る意味がなくなってしまう」

「はい……私は死にません」

また覚悟を決めるようにレイは拳を固める。

「さあ！ ぬるま湯に浸かった反乱軍に俺達の力を見せ付けてやろうぜ！」

「――応つ！」「――」

俺達は城を出る。

さて、一発暴れますか。

「では、行くぞ！ ハンパン！ セイ！」

「はいっ！」

「は、はいですっ！」

「それじゃー、ボク達は守ろうか

「……だね」

「そうですね」

『敵は三人しかいない！ 怯むな！ 殺せ！ 我等の邪魔をする輩は死の鉄槌を！』

『オオオオオオオオオ――！――！』

『さて、やつ等は狂つてゐるがー、俺等も狂つちまうか？』

『えつ、わ、私は……』

「ええ、私も久しぶりに狂つてみます。久しぶりなので……加減は出来ないかもしませんが」

「で、でも私は……」

「そんじゃ、決定」

「私は……」

「それじゃ、行こうか

「私も狂います！」

「よくぞ言つたセイ」

「共に行きましょうか

「はい！」

と思う存分狂つてやるよ。

相手が引くからに。

自分が引くからに。

血で染まつた狂氣に浸りながら。

非常に愉快に、非情に狂おしく。

」の反乱軍を倒す。

「オラッ！..」

大きな斧を振り下ろす。

そんな真正面からの攻撃は避けてくださいことを言つてこようがなも

ので。

「簡単に避けられる

「なつ！..」

背中を斬る。

怯んで相手は避けられないのと、その一撃が背中にあたる。そして倒れる。

「さあ、次来い。どうせだつたら全員で来てもいいんだぜ」

「調子こくなやー..」

横へ振られた剣。

俺はそれを剣で防ぐ。

「『炎弾』！」

至近距離で放つた炎弾は避けることが出来ず直撃。

「『火炎屏風』！」

周りのやつ等は俺の炎で燃やされる。

「おいおい、これでも国の兵だったやつか
そして一呼吸置き話す。

「　　暴れたりないんだよー！」

「ぐへへ、その姉ちゃん可愛いじゃないの。今なら見逃すよ?
だから俺達の軍に来ない？」

見るからに雑魚キャラみたいな人が私に話しかける。

「ねえってば」

その男は私の肩を掴んだ。

「うああ！」

その瞬間に男が叫ぶ。

もちろんだ、私の肩を触れてた自分の腕が斬れているのだから。
「私に触れないでください。触れていいのは私が認めた仲間だけで
すので」

「クソオ！　このアマ！」

斬られた反対の手で剣を持ち私に突っ込む。

私はその剣を弾き飛ばし、怯んでる相手を斬る。

「私に触れた罪、その体で払つてもらいます」

私は普段言わないようなことを言う。

何でつて？　私は今最高に狂ってるんですから。

「『幻影夜桜』」

私の炎の剣が桜の花弁と化す。

「『火桜』」

花弁が炎と化し、相手を襲う。

幻影夜桜の能力。

花弁と化した物の性質を扱うことが出来る。
だからこの場合、炎の剣を桜の花弁にした。
だから炎を扱える。

炎の柱が何本も現れる。

前に戦つた勇者のパーティーと戦つたとき使つた、幻影よりも
とリアルな。

炎の柱。

それにビックリしている反乱軍に言つ。

「貴方等が抱いてる幻想を私がぶつた切つてやります
」

「お嬢ちゃん、ちゃんと戦えるのかな？」

「た、戦えます！」

私は反論した。

でも聞く耳持たずなのか、私を無視して話を進める。

「お嬢ちゃんのお仲間さんが好き勝手やつてくれてるから、僕も手
加減しないよ！」

不意を衝こうとしたのか、話し終わると同時に攻撃を仕掛け
た。

振り下ろされた剣は私の頭上で止まる。

「ひょ、『氷凍』です」

相手は凍り動けない。

氷華は地面を凍らせる技。

一応相手の腕を凍らせるることは可能だけど。

私の動きじや触れられないで『氷凍』で空気を凍らせ。
相手の腕凍らせた。

「『氷華』と『花花弁』です！」

辺り一面に咲く氷の花。

その花弁が沢山の人数の敵に刺さる。
あ、そういうば……狂うんでしたね。
では……。

「『氷狼』です！」

三体の氷の狼。

そして三体の氷の狼が相手に噛み付く。
もちろん相手は行動出来ない。

「『氷鉄砲』」

鋭く尖った氷の弾が相手の中心を貫く。
「久しぶり本気を出させてもらいますね」

前・後ろ・右・左。

色々な方向から来る攻撃。

俺は波動銃を構える。

「（ガニッ）！」

俺が放った波動は相手の武器にあたる。
強い衝撃なので全員が武器を離した。

「ばいばい」

連續で剣で斬る。

「結構少ないな。んにしても、あつちは何だ?
な魔法を使ってるんだ、セイは……」

それにミランのほうも炎が上がってる。
相手が炎を使つたんじやないよね？

「まあ、俺が出来ることをするしかないか」

俺はまた目の前の敵に専念することにした。

騒がしいし、どん

「うらああああああああ！」

「やつと、ボクの出番？ つまんないよ。だからボクを楽しませてよ」

みんなの防御は完璧だ。

だからここにいるのは最初から城にいた人物。つまり反乱者。

「ボクは王様の所に行くよ」

「行かせねえよ！」

「死ね！」

ボクを行かせないために一人がかりで道を防ぐ。

「『加速』」

ボクは相手にいっきに近づき。殺した。

「ここは一人に任せたよ」

「……任せられた」

「お父様を頼みます……」

「任せてね」

ボクは『加速』し、王様の元に行く。

「『紋章』」

私、レイシアは紋章を発動させた。

『紋章』は私の家人だけが使える異術。

「『全向上』」

紋章を自分の力・体力・治癒能力の能力を向上させた。

そして紋章を自分の剣に纏わせる。

「『纏紋章波』！」

纏わせた紋章の力を相手に放つ。

相手は避ける術がなく吹つ飛ぶ。

「さかに死んでやる」

「『文章・炎龍』！」

目の前の紋章から

その龍は相手を一掃し消える。

一、ハラムの問題

ああ、
私は死ぬ
の？

さようならお父様

薄い膜が私を守る。

これは舞華ちゃんの『バリア』？

大丈夫？

卷之三

氣になるとええば氣になりますね。……。

……先輩だつたらこう言ひますよ。『自分の親ぐらい、自分で守

卷之三

私は舞撲しきはめのいじわ。

覚悟を決めたように田つきを変える。

私の方魔をするヤー等は！」

勝つために想像した、だから勝つために妄想するわ

……困つた困つた。

私独りしかいないじゃん。

……私は補強専門なのにや。

……でも、あれでよかつたかな？

「死ね！」

私を襲う反乱軍。

「『全方位防御』」「

「貫け！」

周りから』の一斉射出。

とりあえずこれらの攻撃を防御するのは難しくない。
でも私には勝つための魔法がない。
守るために魔法はあるけど。

「そんな薄い壁、俺が粉々にしてやるよ！」

男は大きなハンマーを大きく振りかぶり、バリアに当てる。

そんな簡単には壊れないだろう。

だけど、私のバリアは破壊されてしまった。

普通の兵より強いやつか。

「おいおい、これだけか？ つまらんな、おい！」

ハンマーで地面を叩く。

そして地割れがおきる。

私はバリアを足場にし移動。

「これなんてどうだ！」

相手がハンマーを思いつきり振る。

それが？

「（ドワアアアアーン）！」「

私の隣を空気が通り抜ける。

ハンマーで風を飛ばした？

「次は当てるぜ！」

！？ また来る。

そして相手はまたハンマーを振る。

「……『バリア』」

私は風が見えないので全体にバリアを張った。

「そんな紙切れ同然のバリアで俺の攻撃が防げると思ったか！」

私の目の前のバリアが割れる音がした。

そして割れる音がしたと同時に私に強烈な風が当たる。

「……ぐつ！」

痛い……。

「これぐらいで壊れたのか？ お譲ちゃん」

回復系は得意だけどアイツを倒す術がない。

「そんじゃ、チェックメイト王手だ」

あー、死ぬの？

ここで私は死ぬの？

小学生の頃。

絵を描いたりするのが好きだった私は賞状を用に何枚も貰つていた。

中学生の頃。

物語を作るが好きだった私は小説や漫画を書いて賞とかとついた。

現在は……。

とある事件によりそれらの才能を封印してた。

それでも私は十二組に入学してしまった。

私には先輩のようにスキルがない。

だから私はこの状況を覆すような奇跡は起こせない。

起こせるとしたら封印を解くことかな。

それでまた先輩の隣に立つていられるのなら。

私は……。

「私は才能を使う！」

私は拳を握り締め立ち上がった。

ん？ 違和感がある……。

「……何これ？」

私が握っているのはペン。

何をすれば？

絵を描けと？

文字を書けと？

「……じゃあ、書いてあげる」

とりあえず武器になりそうな字……『剣』？

私は地面に『剣』と書いた。

そして私の目の前に一つの剣が突き刺さる。

「これが私のスキル？」

リアルピックチャ
妄想現実。

「剣を持ったところでどうした！ 小娘！」

『銃』

私は相手と距離を置き。

銃を放つ。

「ぬう！？」

私はさっきまで銃も持っていないなかつたので、相手は怯み、銃弾にあたつた。

「やりやがったな！ 小娘！」

男はまた地割れをおこした。

「くらえ！」

そして風が飛んでくる。

『風』

そして私も風で対抗する。

「その程度の風で俺が負けるわけなかろう！」

そんなの分かつてゐだから、風をぶつけ威力を抑え、バリアで守る。

それならば私のところまで風はこない。

「……私が描く物語には貴方は必要ない」

相手の心臓に私が持っていた剣を刺す。

書いた物を具現化するスキル。

それが私のスキル。

リアルピグチャ

妄想現実……。

スキルゲットして嬉しそうに「ヤーヤーヤしちゃうね。

「……さあ、私も戦おうかな」

私はいつになく強気で行く。

勝つために想像した、だから勝つために妄想するわ（後書き）

やつと新作ができましたよ！

他にも書くべきものがあるのに……

それは置いといて

結構自信作で

結構自分勝手な作品になりました

それでもよかつたら見てください

仕方が無い諦めたよ

俺は反乱軍に突っ込む。

「『炎弾』！」

炎弾で敵を吹っ飛ばす。

吹っ飛ばなかつた敵を剣で次々と斬つていく。

「オラア！」

男が剣を振り下ろしていく。

剣と剣をぶつけ威力を相殺する。

だけど流石元国の兵。

一般人の高校生では相手にならん。

だから反則チートを使わせてもらいますぜ。

「『無理無力』」

すると相手の武器が壊れる。

相手はそんなこと予想していなかつたのか、油断して俺に斬られた。

「隙あり！」

グサツ！

俺の体に剣が刺さつた。

だが……。

「はははは……！ 勇者を討ち取つたぞ！」

「あー、そつなの」

「えつ？」

パチンッ。

俺が指パッチンをする。

「な、なんで……だ」

俺に刺さつていた剣は違う男の心臓を刺してた。

「『嘘つき道化師』」

お前が見ていたのは俺で。

お前が指したのはお前の仲間だ。
僕は何も悪くない。

「くらえ！」

男がメイスで殴つてくる。

「ノロいノロい」

俺はそれを楽に避けた。
そして銃で頭を打ち抜く。

「おいおい、そこで見るだけかあ？ なあ、反乱軍のリーダー格エ
ルア」

「その名をどこで聞いた？ 勇者よ」

「風の噂でね」

大きな剣を横に座つている奴が俺の前にいる。
名はエルア。

反乱軍のリーダー格。

「お前を殺せば終わるんだが……いいか？」

「何を言つてはいる勇者よ。我がたかが青年に負けるわけないだろ？」

エルアは椅子から立ち上がり剣をとる。

「我にケンカを売つたことを悔いよ」

「悔いるよ。お前は強い。だから俺は悔いるよ

俺はリングから剣を召喚し、剣を力強く握る。

「自分の弱さに！」

それを言い放つと二人は同時に走り出す。

「そうか……仕方ない。『龍よ我に力を』」

“龍よ我に力を”？ 何だそれ？

俺は考えるのを止め思いつきり手に力をいれる。

「オラア！」

俺は剣をおもいつきりエルアに振り下ろす。

「いい太刀筋だ……だが」

大剣で受け止めたエルアはそのまま俺の剣を弾き飛ばした。

「しまつ！」

「これが力の差だ！」

エルアは大剣で俺を真つ一つに切り裂く。

綺麗に真つ一つ。

真つ赤の血は飛び散らずに真つ一つ。

まるで……絵みたいに。

「『嘘つき道化師』^{フエイク}」

斬られた俺は偽者だ。

「『炎弾』！」

沢山の魔力を込めた炎弾を放った。

「ぬう！？ でもこれしき！」

エルアはマントを盾にした。

……ハア？ 盾に？

「炎弾を打ち消した……？」

「ああ、このマントは特別製でね。ある程度の異能な力なら打ち消せる

ふーん、納得納得。

「これは、面白いマジックを見せてくれたお礼だ！」

エルアは大剣を投げた。

「『剣雨』」

上から剣の雨が降つてくる。

俺は走つてそれを避けようとする。

「残念ながらそれは追尾するぞ

だね。

解説しなくても分かるよ。

だつて現に俺剣に追いかけられてるから。

んじや。

『嘘つき道化師』。

声に出さず呟く。

剣の雨は俺を避けるように地面に刺さる。

ターゲット 目標を俺ではなく地面に設定した。

いや、嘘をついた。

「これだけ……」

これだけか？ と眩ごうとした俺の視界に入つたのはエルアの腕だつた。

「遅い！」

エルアは俺の頭を掴み宙に上げた。

俺は抵抗することが出来ず宙でもがいでる。

「勇者と言つても所詮少年だ。俺に勝てなくとも悔しがらなくともいい。それが当たり前なのだからな」

あー、俺死ぬの？

死ぬんだつたら、遺書でも書いとけばよかつたかな？
つてか俺、過負荷マイナスなんだし。

勝てるわけないか。

んー、まー。

最後に足掻きましょうか。

「『諦めか無理無力』」

大剣は俺に落ちる直前粉々に折れた。

「ふん、お前のまか不思議な力のことは聞いてる。予想はできてる
……だからこれで最後だ！ 『土拳』」

大きな土の拳を構えるエルア。

あー、あの拳を消すのは無理かな？

『嘘つき道化師』は今日はもう無理。使いすぎた。

それじゃ……奇跡を待つしかないかな。
体力も限界だし……。

やる気も失せてきたし……。

もう死んでもいいかなー……。

「『諦めたよ無理無力』」

俺は重力に抵抗できず地面に落ちていく。

「もらつた！」

俺の視界に映る土。

「何がもらつたの？」

そこには土拳を喰らつたはずの俺がいた。

「また何かの能力か……」

「あー、まあな。その能力の裏技かな？」

『無理無力』を自分にかけた。

心を凄くマイナスにして『無理無力』で一気にプラスにする、俺の裏技。

「さあ、来いよ。エルア」

「ああ、行かせてもらう！」

土の大剣を持って走つてくるエルア。速い……だが。

「今の俺の敵ではないな」

エルアの剣が俺のすぐ近くまできた。それじゃ……反撃返し。

「超至近距離！』『無数業火弾』！」

文字通り至近距離で炎弾の強化版、業火弾を撃つた。エルアはマントで防ごうとするが遅い。

「くつ！」

流れは止めない！

『『火炎屏風』！』

周りを炎で壁で覆う。

逃がさない！

リングから銃を一瞬で召喚する。

「オラア オラア オラア！」

何発の何発も撃ちまくる。

エルアに当たつているかいないかも確認せず。

「止めた……』『ファイヤー キヤノン』！」

俺の炎の魔法を銃に込める。

残り20%.....。

.....。

完了。

「焼き払え！」

二丁の銃から一直線に炎の弾が放射される。
そして戦いは終わりの幕を閉じた。

仕方が無い諦めたよ（後書き）

「主人公（「」）のところでも書いたけど
来年があなた達にとつて幸せになることを祈ります
……リア充はばく……なんでもありません
ま、来年も紅の雲雀をよろしく！
というか新作の「主人公による主人公のための主人公」をよろしく！
宣伝乙つてことで
良いお年をーー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213u/>

勇者ですか？ いいえ、過負荷です

2011年12月31日16時56分発行